苅萱桑門筑紫轢

作者　並木宗輔

大道廢れて仁義起り、國家亂れて忠臣を顯す。此語を以て鑑みれば、道にも又誠の本あり、其誠の源をたづぬれば、戀慕愛執にしくは無しと。豐葦原の陰神陽神、探り給ひし天の逆鉾、種ひろがりし世々の祚、後小松の院の御治世、隨ひ靡く君子國、時めく春の榮なり。當今いまだ御幼稚なれば、御母通陽門院殿、暫く寶祚を預り給ひ、踏歌の節會を御行事、禁廷守護の武士は、筑前の國の住人、加藤左衞門尉繁氏、肯より詰めて宿直守、假に授る官職に、在京の其間、右大將の烏帽子狩衣、花やかなりし出立も、衞士が焚く火に光添へ、威あつて猛く見えにけり。夜半も次第に更け過ぎて、明方近き星の影、衞士は篝を焚きさして、郁芳門に立出づれば、代る時刻と入代り、出來る衞士は奥女中、御國母の召遣ひ、千鳥といへる品者が、すつきりとした下髪に、似合はぬ烏帽子裝束も、派手な風俗柳腰、男欲しがる曲者とは、目元の愛に知られたり。繁氏卿の後に立ち、どうやら何ぞ云ひたげに、うぢ〳〵すれば振返り、「是はしたり千

烏御前、風流なお姿、扨は今宵の篝火は、其元がお勤か、はてしやれた衛士、焚いて貰ふ篝めは果報な奴」と挨拶の、中にちつくり色持たす、じやれは物師の印なり。千鳥の前は先取られ、何といらへも恥かしく、顔を赤めて居たりしが、てんぽの皮と御手を取り、「七年餘りの御在京、御參内の度毎に、御簾の透より垣間見て、ひよつと燃えつゝ戀の篝火、思ひの煙絶えぬ故、露程なりと此心を、申上げたき願にて、形をやつす衛士の役、胸の焚く火に焦がれ死ぬ、命を助け給はれ」と、御弱腰に抱著く。元より好む色男、否にはあらぬいな船の、漂ふ心を押沈め、「志は過分ながら、禁中在番の某、御所の女中に不義ありなどと、風聞あつては後日の難儀。折もあらん」と云捨てて、振り切り給ふを「そりや成らぬ、はもじい事の有たけを、云はして置いて胴慾な、お上の事は公なれば、こんな詮議はござんせぬ。よしお咎があるならば、罪を私が一人して受けませう。其段には氣遣無く、どうなとせうとつい一くち、嬉しいお詞聞かせてたべ。さう無ければ何ぼでも、放しやせぬ」と取付くを、「イヤ〳〵夫は勝手了簡、高呑込で受合はれぬ、許し給へ」と振放し、彼方此方へ外しても、猶も離れず附纏ふ、折もこそあれ御簾を巻上げ、御母通陽門院、關白良基公を始とし、公卿を伴ひ出で給へば、二人は庭に敗亡の、迚けもやられず平伏は、誤り入りし風情なり。國母御聲麗しく、「苦しからず、遠慮なせそ。深く

も思染めたりし、色をばいかでさますべき。コレ〳〵繁氏、國に妻子を殘し置き、枕の伽も七年餘、懈怠無き勤番の、褒美に千鳥を取らすべし、寂しき閨の友とせよ。其いにしへ、近衛の院、源三位頼政に下されしは、池の眞菰に水増して、引きぞ煩ふ菖蒲の前、夫には引替へ戀風に、吹立てられし浪の上、啼騒いだる千鳥ぞや。長く比翼の友羽がひ、打交せよ」と宣旨あれば、「コハ有難し」と繁氏卿、千鳥は猶も悦びの、胸落著けど心は急き、「又もや御意の變らぬ内、私はお屋敷へ、お先へ參つて待ちませう、お前は跡から御歸館」と、早しこなせし妻形氣、いそ〳〵立つて入りにけり。折からしらす朝嵐、人の面も白々と、明渡りたる四方の空、「御番の代り」と聲かけて、豐前の大領大内之助義弘が舊臣、多々羅新潟左衛門秀貫、白髪交りの曲者、階下間近く額を下け、「今日守護の勤番は、主人大内義弘が役目の所、此間より所勞に依つて、某が名代、御赦免仰ぎ奉る」と奏すれば、繁氏立寄り、「病氣とあれば餘儀無き仕合、天子にも勅許有るべし。イザ役目を讓り代らん」と立出でんとし給ふ所へ、執權監物太郎信俊、「奏聞の事あり」と、訴出て庭上に畏り、「扨も高雄の御山は、觀音薩埵の靈驗あつく、諸人の信心日々に彌增し、歩を運ぶ靈地なるに、十日ばかり以前より、身に香染の袈裟を懸け、おどろの髪振亂し、高足駄にて異形の行人、夜は洞穴に取籠り、晝は山を徘徊して、往來を惱す由、昨日夜更に及びて

の注進、如何計らひ申さんや」と申上ぐれば、關白良基公笏執直し、「出家ならば佛意を慕ひ、難行苦行に身をこらし、道をためす教もあり。有髪の行者は心得ず。殊に往來を惱す由、何にもせよ聞捨てになり難し。帝都の騒ぎにならざる樣、汝密に行き向ひ、都の内を逐拂ふか、異議に及ばゞ召捕つて糺明せよ」と仰の内に、「承る」と立つ所を、新洞左衞門「暫し」と呼留め御前に向ひ、「夜前までは彼が主繁氏の勤番、今朝よりは手前の主人、大内義弘が役目、此討手某めに仰付られ下され」と、願へばやがて監物太郎、「イヤ是新洞殿、高雄山は北嵯峨に相續き、主君繁氏が預り場所、其上拙者が承つた役目、横間より手前へとは我儘至極」と云はせも立てず、「ヤア武の道から武を望むを、我儘とは舌長し。是非此討手を某に」と、云捨て立つを、「どこへ〳〵、人の役目を好い年して、かち落さうとは大人氣無し。似合うた樣に圓座の上、髭を數へて居召され」と、詞荒して駈行くを、走りかゝつてしつかと執へ、「年は寄つても此親仁、まだ腕先には覺がある。行かれうならば行て見よ」と、引留めたる力瘤、「エ、面倒なる老耄め」と、もぎ放せば摑付く。「待てよ〳〵」と關白の、仰も聞かず繁氏の、詞も餘處に監物太郎、一ふり振つて振放し、飛ぶが如くに駈出すを、奈落までもと新洞左衞門、辭儀も作法も白砂を、踏散らしてぞ追うて行く。通陽門院叡感あり、「大内には歌爭、武士は武を爭ふ、其家々の習と

て、勇しき有様かな。勇む心に迎ひを待たず、嫁入急ぎし千鳥の前、さぞ館にて待ちかねん。宿の時を暖めて、友鳴にせよ繁氏」と、御褥を立ち給ふ、御戯は常陸帯、結ぶ契は千代八千代、變らぬ國の三重春風も、匂を含む一霞、都は辰巳高雄山、峯は斜の白雲に、巌聳えて茫茫たる、雪も解け行く谷川の、苔滑かに松の聲、げに物凄き景色なり。被衣に靡く若草の、素足で歩ふ御所女中、男交りにざゞめくは、千鳥御前のお乗物、繁氏卿のお館へ、押付けて行く嫁入分、道を廻つて觀音詣、結ぶ誓のかねの緒に、縁も長き山坂を、息休めにとお乗物、松の木陰に立てければ、今日ぞ雲井の眉解けて、立出で給ふ千鳥の前、花を限どる御姿、褄吹返す戀風も、憂きとや人は羨まじ。蚊ともはざわ〳〵と、籠を放れし里雀、中にも梢が囀りて、「なんと皆の衆、小面の憎い此松に、抱付いた藤わいの。丁度あの様に千鳥様も、繁氏様にしがみ附いて御座らうの。彼様器量の好い殿御、御果報なあやかり物」と、なぶり懸れば礎が差出で、「そりや知れた事、云やるがくだ。したが、どうも呑込まぬは彼方のお心、今までは御所住居、やもめ烏の千鳥様、飛立つ程に思召し、一寸でも早うお屋敷へござる筈、それに氣疎い廻りして、觀音参りが心得ぬ。お持たせ振の道草か」と、尋ぬれば打笑み給ひ、千「様子知らねばさう思ふも理、いひ出すも恥かしい事ながら、繁氏様に惚れたのは、今更の事ならず、とうから惚

れて居るわいの。お國には石動君とて、若殿まである御臺様、れつきとして御座るとは知りながら、思ひ初めては忘れず、焚付けて見る衞士の篝火、姿をくろむ濡衣、つい門院様に見付けられ、ハット心に思ひの外、お氣の通つた粋な勅諚。是と云ふも自が年月念ずる心の誠、偏に觀音様の御利生と思ふから、道よりしてのお禮參り。オ、恥かし」とばかりにて、御乘物に召し給へば、礒夫なれば御尤、愈大悲のお力で、いぢむぢのない様に、晩からはねびのだん、段々によい戀枕、うん〳〵雲雷くうせいでん、雷に臍取られぬ内、急ぎや〳〵」と我一に、行掛りたる向ふより、惡者作りの深編笠、供先押割りのつさ〳〵、「ちと乘物へ御訴訟」と、のさばりながら立寄れば、家來の者ども聲々に、「願訴訟の事ならば、なぜ記錄所へ往て吐かさぬ。ハレ狼狽へた素浪人」と、嘲笑へどちつとも怯まず、「おのらが知つた事で無し」と、押退けて乘物の傍近く、「コリャ妹、見ぬ顏するは手が惡い。兄黑塚の鬼藏人、見忘れはしよまいがな。最前から樣子を聞けば、そちは今日繁氏殿へ嫁入をするとの話、それなれば無心がある、某をお館へ連行き、私が兄でござる、お取立賴みますと、たつた一口詞を添へなば、義理にでも繁氏殿、世話しやらねばならぬ事、さすれば兄が身上に有付く。とかういへば思案がある」と、妹に向ひ居合腰、刀捻くり嚇せしは、大人氣無くも面憎し。當惑ながら千鳥の前、乘物の戸を押

明けて、千珍しや藏人殿、まだ息災で此世に御座るか。ヘエ、此方はの、いふに及ばぬ事なれども、父上黑塚群窶樣は、代々續く禁裏の博士、君の覺も目出たき家柄、男の子とては其元おひとり一人、跡目も相續する身を持つて、十年以前淸涼殿のお能の時、醉狂の上人を過ち、直に夫よりお前は駈落、其お咎にて父上は、浪人し給ひ貧しき世渡り、悴故に家を刋し、先祖へ對して言譯無し、必ず何國で出逢うても、兄と思はど共に勘當と御遺言にて、貧家の死をばなされたぞや。夫に今更妹よ千鳥よとは、どの顏さけて對面ぞ」と、恥ぢしめられてさしもの惡者、押俯向いて詞無く、砂にのの字を書き居たり。千鳥の前ば涙を押へ、「ア、怨むまじ、返らぬ事、皆の衆の手前も思はず、よしなき昔の長咄、日もたけて嘸やさぞ、繁氏樣にもお待ちかね、心急かれ」との給へば、「そりやお急ぎよ」と六尺ども、腰を振出す五枚肩、行く乘物の棒しつかととらへ、「イヤ妹、そう旨うは拔けさせぬ。何國までも同道」と、ねれけ懸れば家來の者ども、目をむき出し、「聞いた樣子が大泥坊、兄貴めでも大事ない、性根の直る異見の爲、目に物見せん」と立ちかゝり、遠慮會釋も生木の息杖、足腰かけて用捨無く、からさを投に打ちのめし、「厄介な繩くらひ、棒をくらうてよい氣味か」と、どつと笑うて行過ぎる。藏人漸起上り、脊骨をさすり齒がみをなし、「ヘエ、罰當りの妹め、此分で濟まさうか」と、駈出す後の方、「暫し〳〵」

と留むる行相、香の衣を身に纏ひ、亂髪逆に生茂り、一丈餘りのかつらの杖、高足駄踏鳴し、悠々と立出づる。さしもの藏人肝を消し、暫し詞も無かりけり。「ホヽ、目馴れぬ姿不審顔は尤々。我此程より大願の仔細あつて、當山に分入り身を凝らせど、胎金兩部の峯も慕はず、赤木の數珠を押揉んでは、四海を胸に疊む妙術。汝妹が緣を賴みに、繁氏に仕へんとは、迴遠き分別、某が幕下につかば、高祿を得せしめ、先途を見屆け取らすべし」と、さも横柄なる詞つき。何がなかきつく猿智慧の、押直つて頭を下け、「何が扨〳〵、落著く島も無い某、いか樣ともお目がねに預りたし」と手をつけば、行「ヲ、賴母しょ〳〵、いで〳〵汝が高祿出世の手がかりとなる判じ物、よく判じよ」と歩寄り、松に絡みし藤葛、若葉は爰ぞと杖取延べ、丁々々と二枝三枝、薙落して、「是見よや、元來加藤は藤原氏、其藤をまつ此如く切放す、早く此心を察せよ」と、いふに角ぐむ鬼藏人、額の皺に智慧かき寄せ、「ムヽムヽ、近年の謎したり〳〵。其藤原の藤の枝を切捨て給ふは、此藏人に繁氏が首」「ア、聲高し、密に〳〵。すりや判じたる心底は」「成程討つ氣でござれども、未だ君の御名をも明されねば、あつとは得こそ申すまじ。まづ姓名を御聞かせ」と、云ふに頷き、行「ホ、うい奴、でかいた〳〵。かく胸中を見据ゑし上は、何か包まん、元某當山に住む者ならず、九州に隱なき、大内之助義弘といふ者。そも此山に艱苦する事、我多

年天下を望み、日夜朝暮大玄谷神の呪を唱へ、又は諸國の安否を窺ひ、國家を握る企なれども、合點の行かぬは繁氏一人、助置いては大望の妨げ」と、語る半へ轡の音、程近く聞ゆれば、奇異の思を大内之助眼を配り、「ヤアラ心元なし、暫しが内我は窟に身を隱さん、汝も暫し忍べよ」と、云含めつゝ引別れ、茂りの内へ入りにける。夕日に背いて向ふ高雄山、勇の鈴もはなやかに、馬上ゆゝしく乘りたるは、監物太郎信俊、身は腹巻に小手臑當、暫時に馳ける沛艾馬、鞍に引添ふ譜代の郎等、大佛新藏諸侍、息をはかりに駈來る所へ、遙にさがつて「オヽイ、オイ」と呼かける。心急けども監物太郎、何事やらんと手綱かい繰り、駒をかへせば新洞左衛門、頭に星霜降積れど、體は忠義の韋駄天走り、徒士だちになつて駈付け、「ヤア曲もなや監物太郎、朝廷にても爭ひし今日の討手、是非某にふり替り、其方密に歸つてくれ、頼むく」と云ふ間を待ちかね、監「ヤア心得ぬ御邊が胸中、さまでの討手にもあらざるに、息筋張つての所望、但し其曲者に由緣あるや、心底明さば品により、了簡もあるべきが、無體の望いぶかしく」「ホヽヲそれも尤、何を隱さう閑居して、異相に見ゆる行人は、我主君大内之助義弘殿。オヽ驚きはさこそく。かく打明くる上からは、爰が互の了簡づく」と、云ふを打消し聲荒らげ、「ソウ聞いては猶赦されぬ。禁裏表は所勞と僞り、此山に隱れ住んで、何の爲の難行苦行、それを明

さば兎も角も、サア其様子は、仔細は」と、問詰められて、「イヤ其義は、其事は」と、差詰つたる返答に、「ヤア狼狽へたる一言、家來として主の心推察せずに仕へるか、善ならば善、悪ならば、なぜ諫言を加へぬぞ、不覺者」と云捨てに、引直す轡面、追取つて引留め、「オ、尤なり監物太郎、汝が主の繁氏殿とは事かはり、主君大内は古今の猛將、思ひ込んだる初一念、中々家來の諫も聞かず、存じ付いたる大願有りと、仔細いはずの山籠り、禁廷へは所勞の云立、萬一此事顯れては、上を掠むる大罪、大内の家の滅亡、さるによつて某が、無體に討手の役目を願ふ、主持つた身は相互、一生覺えぬ此親仁が、手を下げる、聞分けよ」と、いへども聞かず、「いや〳〵〳〵、洞穴に壇を築き不及の望なす者多し、假初ならぬ勅命を受け、善とも悪とも仔細を聞かず、私に了簡する事ならぬ〳〵。コリヤ大佛、無益に時刻も押移る、構はずとも皆引連れ、山の手を追取巻き、大内之助を逃すな」と、下知に隨ひ供廻り、一度に勇み入りにける。元より短慮の新洞左衞門、無念とや思ひけん、「ヤア奇怪なり監物太郎、六十に餘る某に、様々の口たゝかせ、其上主君と名を明かさせ、無得心なる人畜生、いつまでも動かせじ」と、乘つたる馬の尾本を追取り引戻せば、又馬上には障泥を打ち、ハイ〳〵〳〵と乘出す、互の忠義に精氣を揉み、心は逸れど老の腕、次第に緩む疲を見込み、爰ぞと監物はずみにあふり、丁ど當つれ

ば跳上る、馬の蹴上げに新洞左衞門、はね倒されて伸る所を、障泥と鞭を打重ね〳〵、馬を飛して一散に、奥山指して駈け行く。新洞怒の歯を噛みしめ、忠義に固まる老の両足、踏固め踏みしめて、追駈行く一筋道、通り懸りし鋲乗物、向ふ見ずの新洞左衞門、供先押割り駈行くを、つき〳〵の侍立塞り、「不作法なる老耄、此乗物に召したるは、忝くも禁中より、繁氏卿へ御入ある千鳥の前、片寄れ下れ」と罵つたり。新洞左衞門心づき、是こそは監物めに、ほで合させる質物と、乗物の棒しつかと執へ、「ハレよい所へ千鳥の前、乗物を踏砕き駈通るは易けれども、こつちに少し入用な。元の所へ舁戻せ、宰領は此親仁」と、力に任せ「コリヤ〳〵〳〵、エイ〳〵〳〵」と突戻せば、色眞青に、妬ども、足もよろ〳〵六尺も、降つて湧いたる災難も、すべき様なく理不盡に、深山を指して押登す。暫くあつて山の巓、義弘が籠りたる洞のあたりをうそ〳〵と、尋廻りし若侍、頬冠りにて顔隠し、明乗物を此方に吊らせ、巖の前に禮義正しく、「イカニ我君義弘卿、今日禁庭の風聞、當山に於て隠住の族、急ぎ誅せよとの勅諚にて、則ち討手向ふの評定、此義密に達せよと、主人新洞左衞門が注進によつて、則ち家來岩淵平馬、御迎ひに參上」と、似つこらしげに呼ばはれば、洞の扉を押開き、義弘は寛々と、さあらぬ體にて歩出で、「何新洞が家來迎ひに來りしとな、大義を起す某、小事の害を待たんより、一先此場を

逃れん」と、乘物引寄せ飛移れば、仕濟したりと鐵の大網、雙方より打きすれば、監物太郎駈來り、大聲上げ、「ヤア〳〵大内、武士の山籠り、不審をはらせの勅命にて、加藤左衞門繁氏が家來、監物太郎向ふたり。言譯あらば天奏にて申し開かれよ」と、いふ聲を聞くよりも、大内之助五躰を搖る唸聲、「ヤア〳〵黒塚はをり會はぬか、藏人は出會はぬか」と、乘物兩手にめりめりぐわた〳〵、一人前の大地震、うめく斜に鬼藏人、尻引裏げ飛來り、有無を云はずに無二無三、切つてかゝれば大佛新藏、丁と受けて受流し、眞向微塵と切りかくれば、こは叶はじと鬼藏人、はふ〳〵逃げて失せにけり。かゝる折しも岩蔭より、新洞左衞門秀貫が、追立て來る餓乘物、「コリヤ〳〵監物、推量が其乘物、某が主君大内殿よな、さこそと知つて此方もぬからぬ。此奪取りし乘物は、汝が主人繁氏へ、禁中より下されし千鳥の前、奪取つたは汝へ面當、主君大内を戻せばよし、さも無くば恨の刃、此乘物へ突通す、如何に〳〵」と聲懸けたり。「南無三寶」と監物太郎、「コリヤ新洞、勅命下りし千鳥の前、殺さば汝朝敵同然」新「ヤア主を攝になすからは破れかぶれ、サア返答は」と刃の影、監「やれ待て、急くな〳〵。左程忠義を立つる根性、無下にするも本意ならず。殊に主君の寵愛、殺さるゝも殘念、理を非に曲げて乘物ぐるめ打換へて得させん。さりながら、勅命受けて生捕つたる曲者、私に助けては、朝家の聞えも恐有り、

此義にあぐむ」と云はせも立てず、「ヤレそれは一途、高雄山の異行人、追拂へとは最初の勅、生捕れとは異議に及ぶ時の事」と、云ふに頷き、「それよ〳〵、いざ乗物を表立ち渡してくれう、安堵せよ」と、家來に云付け舁上げさせ、「こりや〳〵新洞慥に聞け、洛中洛外追放の行人、網きせて渡すぞ」と、いふに悦び、「尤々」また幾千代の友白髪、祝ふ嫁御の色直し、雲井の薫蘭麝の乗物、雙方一度に取かへし、損得無しの山道を、分けて信俊秀貫が、肩も揃うてエイサツサ、誘ふ嵐の入相は、かねて思ひの羽を伸し、濡るゝ鴛鴦妹脊鳥、是は遁れぬ網鳥や、網代のうきに大内之助、伴ひ歸る忠臣義士、例は少き君が代に、揚ぐる譽は高雄山、勇みいさむる夕間暮、別れ〳〵になりにけり。

第二

唄 九十九折には次手馬、川瀬は船の自由する、八幡山崎二山の、間を棹さす船渡し、黄昏よりも火を點し、夜もすがら渡すゆゑ、狐川とはいふやらん。筑前の國の城主加藤左衛門繁氏卿、勤番の隙詣、八幡を懸けて山崎や、渡場近くなりければ、暫く此方に立休らひ、「ヤ家來ども、都は洛中洛外とも、孰を孰といはれぬ風景、別けて男山の昔を尋ぬるに、豐前國宇佐の郡より、

勸請ありし正八幡宮、御鎭座もことわり、紀刕きやらさんとも云つゝべき御山、入日に輝く風景、いやはやどうも〳〵。斯樣に方々の詠に心浮れ、思はずも日が長け、はや暮に及ぶ、提灯の用意はよいか。見れば渡船も向ふへ漕行き、戻るを待つも退屈、堤傳ひに行くべきぞ。案内せよ」とありければ、御供の若黨横口戸平、家老顏する緩怠者、つゝと出て、「ハレヤレ殿には御存無いか、此道は登船の引場、道のだくぼく、中々歩まるゝ所ならず。旦那は乘物にもお召しなされうが、家來は何になるもの、渡しをお待ちなされよ」と、出過た慮外も仁者の優美、「いかさま、三里廻つて本海道といへば、悪所を行くは不行作、所の名さへ狐川、ばかされてはなるまい」と、御戯も時の興、挾箱に腰打掛け、暫し休らひ給ひける。日暮を急ぐ旅人の、五人七人一連に、乘り後れじと岸蔭に、立集れば向ふより、漕來る船も人の酢、著くと乘手は乘ろとする、上ろとすると兩方が、揉合ふ中に浪人と、覺しき武士が上りがけ、又此方より乘る人も、同じ風なる侍が、せり合ふ中を摺合うて、何とかしけん互の大小、もぢり合ひしを急ぎ業、解く拍子に一方の、脇指ほつきと折れにける。ハツとばかりに折られし侍、面目無さに笠傾け、たゞずむ内に相手の浪人、行過ぎるをこたへかね、「待て暫し」と呼かける。急ぐ身なれど是非なくも、立留りし互のきつ相、「スハ事こそ」と船は逃げ、繁氏卿も乘り後れ、さながら逃

けても退がれねば、せん方煙草燻らして、打詠めてぞ在します。件の侍折れたる脇指拾ひ持ち、相手に向つて詞も荒さず、「誠に恥を申さねば理が聞えず。拙者めは遠忝者、永々の浪人故尾羽打枯し、餓死せんよりはと存じ、武士の有るまじき一腰を賣代なし、奉公かせぎに西國へ罷下る。時の過とは申しながら、此方と摺合ひに此如く、指添をこぢ折り、あれに歴々も見てござれば、面目の雪ぎ様なく難儀に及ぶ、何卒了簡の付くべき義ならば、了簡付けて御通り下され。それとも御思案に及ばずは、御不肖ながら相手になり、討果して下されうや。お返事次第」と相述ぶる。相手の侍ちつとも臆せず、「御尤至極〳〵、手前麁相者ゆゑ思はずも無調法、ガ討果す儀を御詫は申さぬ。併し指添が竹光故、面目無いとは、胸中が小い〳〵」「ア、これ〳〵、指添でも武士の魂、竹光でも苦う無いとはな」「ホヽ一筋なお心故、是しきを恥辱と思召す、イデ某が大恥かいてお目に懸けん」と、刀抜出し両手に握り、遠慮會釋も鞘ぐちに、ほつきと折つて目先へ突付け、「是御覽候へ、手前も此通り。拙者めは播州浪人、都方へ奉公捧の、路銀何かに詰り、まだ其元は指添、拙者は刀、恥辱は倍増す武士の魂、折つて見せたは外聞を、倶に現すお腹癒せ、夫とも討果す儀に違背は致さぬ、お相手にならうか、と申して好みも致さず、又逃げも仕らぬ、如何樣とも御勝手次第、サアお返事は」と膝立直せば、「ヤレお急なされな、言分

無い。ハレ其元にもいかい艱難なされたの、由なき儀を申懸けお刀を折らし、お腰が空いて氣の毒」「イヤ拙者めが麁相で其元のお腰が」「ハテ夫は此方も麁相」「是は〳〵夜中故確とお顔も見えず、御縁あらば重ねてお近附に罷成らう」「左樣致さう、はれやれお隙を取りました」と、互の禮儀砂打拂ひ、立別るゝを横口戸平、大口開いて高笑ひ、「やれ〳〵、いかに浪人すればとて、折れる物を腰に挟み、奉公抔とは野太い和郎達、イデ武士の見せしめに、面見て置こ」と立上るを、繁氏はつたと睨付け給ひ、御帶刀に手を懸けて、怒を含む御顔ばせ、悪者作りも主の威に、恐れてかしこに蹲まる。行過ぎたる二人の侍、立止つて一思案、心ならずも雙方が、引返して暫くは、互に詞も無りしが、脇指折られし侍小腰を屈め、「誠に其元には刀を折り、我心を宥め下されたれども、今お聞きの通り彼處なる御家來、何彼と悪口せられ、何とも此場が濟み難し、御思案極め下され」と、横口戸平を尻目に懸け、怒を含む物ごしに、「いかさまあの通りに沙汰あつては、お互に身上仕官の妨げ、一旦濟んだる事なるに、由なき匹夫の口先故、討果す事近頃殘念、と云うてあれしきを對手にも大人氣なし、又其主人へ兎や角いはゞ、浪人の糧に盡き、物取などと蔑せられん。エ、是非もなき次第、此上は潔う刺違へ、最期を倶に致すまいか」「成程拙者も其覺悟、ハテ命冥加な下郎め」と、繰返し〳〵、殘多げに戸平を睨付け、

「イザ此所で」「尤」と、雙方最期の身拵へ。繁氏外の家來を招き、何か呼き給ふにぞ、相心得て乘物より、御指替の大小を、頓て取出し差上ぐる。其間に兩人座を占めて、既にかうよと見えければ、「やれ暫く」と立寄給ひ、「最前より御兩所の心底、尤さこそ有るべき儀、併し大功は細瑾を顧みずと申す、僅の恥に命を捨て、何國の誰と知らざれば犬死も同然、又お腰の空いたるは、指錆びたれども某が、指替にて塞ぎたし、異議無く貰ひ給はらば、喜悦ならん」と一腰づつ、差出し給へば兩人とも、ハツトばかりに平伏し、「有難き御裁配、違背申すは憚ながら、いづくいかなる御方とも存ぜず、まして御恩受ける筋無し、此儀は御免」と辭退の詞。「ホヽ一理あり至極せり。某儀は筑前の國、加藤左衞門繁氏と申す者、則ち當所は禁廷より、馬の飼領に下し置かれし拙者が領分、其場にて兩人とも横死あつては跡の難儀、其難儀を遁れん爲、進上由すき〳〵、「冥加に餘る御情、何時の世にかは忘るべき。元我々は」何某といはんとするを、「ァヽコレ〳〵、お名承つては恩に懸けると申すもの、志が無足致す、顔も知らず名も知らず、重ねてお目に懸つても、お近附でござらぬぞ、急ぎの道お出であれ、お立ちあれ」と、慈悲に慈悲増す御詞、兩人餘りの難有さに、返す詞も無き中に、猶も手をつき頭を下げ、「かくまで深き

御情、申すは恐多けれども、とてもの事に此場のしぎ、御家來も沙汰無き樣、仰付けられ下されと、願へば繁氏返答無く、最前笑ひし若黨の、横口戸平を呼出し、「汝に別して用事あり、是へ來れ」と仰に任せ、何心無く來る所を、飛びかゝつて首打落し、「手前の政道はかくの通り、外に他言は致すまい。お別れ申す」と細道を、分けて情の御捌、有難しとも兩人は、御後影伏拜み〳〵、爰は所も男山、正八幡の化身かと、思ふ迷も狐川、渡しを急ぐ旅人と、陸を早める浪人の、心は一つ、行く道は、二つに隔つ淀堤、左右へこそは、三重別れ行く。梅を諸木の兄とせば、櫻は花の振袖や、姉が小路に美を盡し、華麗を飾る殿造り、加藤左衞門繁氏の館には、庭を野山と櫻狩、上下ざゝめき賑へり。奥方近き坪の内、下部の出入叶はねば、姚衆が掃除役、中にも小りうが竹箒、塵取さらへと掻交ぜて、問はず語りに、「なんと皆の衆、此廣庭へ出臍の樣に、あの社は何といふ神樣ぞ、あた邪魔な、掃除が成らぬ、箒ついで掃出そちやあるまいか」「コレあの人とした事が、あれはお國から勸請なされた殿樣の氏神樣、麁末になどしやつたら、逆罰が當ろぞや」「ム、お國から取寄せるのをば勸請といふかや、そんなら今度お國から、勸請なされた御臺樣、千鳥樣と殿樣のしつほりを御覽じたら、ふんすんで堪るまいと、案じたはあての拙、お妾女郎と奥樣の、中の好いのはどうした事、あんまりで拍子が無い、序に悋氣もお國か

ら、勸請したら可からう」と、苦もしどもなき高咄。折から塀の外面には、萬よしなを取交せて、賣る商人の聲高く、ほの聞ゆれば妙ども、「そりやこそ例の百物賣、小面の憎い商人め、裏門から呼込んで、騙つて遊ほぢやあるまいか」「こりや可からう」と騒ぎ立ち、何がな見たがる聞きたがる、浮氣盛りの女の童、門の戸明けて呼込めば、「ハイ粉類なら何なりと、蕃椒でも胡椒でも」「イヤそんなもな入りませぬ、例の樣に賣立てて聞かさつしやれ。夫が厭なら何にも買はぬ。早う〳〵」と口々に、せがみ立てられ、「まつかせ」と、頬杖ついて聲張上げ、歌「のこのこや豆の粉や、まめな手くせに尻こぶた、ふつゝりひゝりと山椒の粉、奴樣には蕃椒、坊主の好な胡椒の粉、若い嫁御のはなはじく、姑御には辛子の粉、おてきに盃さしもぐさ、身柱九十一、するで心もちや吉野葛、召しませい」とぞ賣りにける。妙どもは目を引き袖引き、「マア當分何にも入らぬ。太儀に能う喋りやつた。のこ〳〵去にや」と打笑ひ、一度に奥へ走入る。商人は荷を卸し、商「エ、今日も又取りくさつた、テモなめ過ぎた女ろさいども」と、呟きうそそ差覗き、彷徨く内に監物太郎、ひよつと來懸り小蔭にて、窺ひ居るとも知らぬが天命、荷箱の内より大小取出し、身拵へしてのつさ〳〵忍び入るを、「曲者待て」と呼懸けられ、南無三寶と振返る、透を有らせず庭に飛降り、摑んで大地へぎやつとのめらせ、足下に踏まへ、「ヤアラ

心得ぬ賣人め。荷箱の内より大小を取出し、奥を目懸けるきつさう、いかさま仔細ぞあらん。眞直に白狀せよ、骨を斷つても云はさにや措かぬ」と、挫ぎ付くれば吠面ながら、「ヤア下郎とは舌長し。傍等があがまへかしづく、千鳥の前が兄黒塚の鬼藏人、繁氏が爲には小舅、主同然の某を、土足に懸けたる詞當りめ」と、云ふに驚く色目を隱し、「シテ其兄が何故に、切込んで誰に敵對、目指す相手の名は何と」「ヲヽ其目當は加藤左衞門、繁氏が首取つて、知行にする」と撥反すを、起しも立てず「扨こそ」と、刀の提緒手ばしかく、後手に縛上げ、「定めて一味の輩もあるべし、密に詮議」と引立つれば、奥より來る女中の足音、見付けられては詮議の妨、如何はせんと取つ措いつ、思案の扉開いて、幸ひ暫しの獄屋、神は見通し「赦させ給へ」と、社の内へ無體に押込み、鍜錠しつかと卸し置き、さあらぬ體にて入りにけり。妹脊の中にかたまりし、石動丸の御母君、牧の方とは申せども、子持と見えぬ御形、花見座敷へ出で給へば、跡に續いて千鳥の前、大内山の木隱れより、移し植ゑたる花なれど、さすが妾と本妻の、禮義は懸の品定め、「ノウ千鳥樣、つれあひ繁氏樣、七とせ餘り禁裏の勤番、首尾好う勤めておしまひなれば、是からお國で御休息、永々の在京に、夜の御殿の伽も無く、お寂しからんと案ぜしに、自になり代り、殿の心を慰むる、そもじ樣があるとの噂、國元で聞く其嬉しさ、とんと心が落著いて、

緩々〳〵登りし今度の御迎ひ、今日は歸國のお願に、禁裏樣へお上りなれば、お暇が出るや否や、此方樣を國へ伴ひ、たァんとお禮を申さにやならぬ」と、奥底も無き御挨拶、「是はまあ有難いお詞、今更申せば何とやら、言譯がましく惡けれども、數ならぬ身の、殿樣に添臥、御臺樣のお目に懸らば、お呵りもあらんかと、思ひの外な御憐み、さう結構におつしやつては、お返事もなり惡し、千鳥よどうせいかうせいと、姒衆同然に御意なされて下さりませ」「ハァテわつけもない、大事の殿御を半分づつ、いとしほがつて貰ふもの、如在にしてよいものか。其代りに此上外で殿樣の、惡性があるならば、二人して云はうぞへ」「そりやお氣遣ひ遊ばすな、お前にお世話は懸けませぬ、御名代と二人前、私が番を致しませう」「ヲヽそれ〳〵」と頷き合ふ、中好き魚と水入らず、姒どもは手をざをに、お氣慰みと持運ぶ、雙六盤や歌がるた、野風爐提重茶辨當、取散せしはお座敷を、野山にうつす花見酒、數々廻る盃に、御臺所興じ給ひ、「追付け殿樣お歸あらん、お目に懸けるも二人が御馳走、アノ櫻を題にして、腰折なりと一首づつ、短册を付けまいか」「コリヤようお氣が著きました、及ばずながら私も」と、雙六盤を眞中へ、脇息に押直させ、二人が臂を掛けまくも、かしこき國の和歌の道、案じ入つたる御酒機嫌、心隔てぬ中々は、何に遠慮もなぎさ漕ぐ、蜑の小舟やとろ〳〵目、すや〳〵寐入り給ひければ、姒

どもは呀き合ひ、「中の好い同士打解けて、テモ快う御寐なつた。お目の明くまでこちらものんき」と、座敷の障子そつとさし、皆々一間に入りにける。程無く左衛門繁氏卿、歸館を告ける奥使、跡よりしづ〳〵入り給へば、監物太郎出迎ひ、「是はしたり、殿様のお歸を、奥方には御存じ無いか」と、一間にかゝれば、「さなせそ〳〵、餘念無く寐入りし體、互に嫉む色も無く、睦じきこそ滿足なれ」と、悦び給へば頭を下げ、「何様御意の如く、嫉妬のあるは婦人の常、其氣遣無き御二方、かくまで御中宜しき事、我々までの大慶」と、申上ぐれは繁氏卿、傍なる盃取上げ給ひ、「禁庭表の首尾も好く、歸國の暇を賜はりし悦び、我もかれらが花見の相伴、二人が風情を肴にて、花の本の一獻、酌せよ」とのたまへば、ハ、ハツト銚子を押取り、つぎ懸けたりし不老不死、藥の水の滴りと、一つ受けさせ給ふ折節、雲心なく吹く風の、盛りを散すひと嵐、受け持ち給ふ盃へ、莟一ふさ落ちにける。繁氏つく〴〵打眺め、「散ればこそ、いとゞ櫻はめでたけれ、とは詠みたれども、雨にしぼみ風に揉まれ、盛りの散るはとがならず、未だ時にも逢はぬ此莟、盃の中へ散つたる事、是こそは人界の、果敢なき教の老少不定、老いたるが先だつとも、若きが跡に殘るとも、定め難きは人の命、忘るまじきは後生の道」と、文武に猛き繁氏の、無常を觀ずる悟道の一言、打悄れたる御有様、監物太郎も尤と、俱に悟りは開けど

も、故と詞に勵みを付け、「こは言ひがひ無き御迷ひ、釋迦といふ賣僧頭、樣々の僞りを書きちらし、一文不知の嫗嚕を、たらさん爲の一切經、喩へて申さば盜賊を捕へ、殺生なりとて助け歸さば、國家の憂となる道理。アタ忌はしき後生の道」と、心に思はぬ雜言に、佛法誹るも諫の忠言、心を感じて打頷き、「誠に汝がいふ通り、弓馬の家に生れながら、假にも無常に引かされては、武の道は立難し。此後ふつつと思ふまじ。さりながら、よしなき事に心もめいり、何とやら物淋し。次の間にて檢校に琴を彈かせよ、御臺や千鳥に目を覺させ、我は是にて慰まん。早疾く〳〵」とのたまへば、只當然の御戲れ、强ひて諫に及ばずと、御前を立つて入りにけり。「ホ、いつに無き我が佛法歸依、武邊に弛もつかんかと、案ずるは尤々。イデわつさりと酒宴を催し、結ほれし氣を晴らさん」と、立寄給ふ障子の內、不思議や俄に物騷がしく、あたりに響き、庭の木草もさわ〳〵と、風も身に沁ばかりなり。こは心得ずと一間の障子、さつと開いて見給へば、餘念無く臥し給ふ二人の黑髮、眞逆樣に蛇の如く、鎌首ほつ立て咬合ふ有樣、さしもの繁氏怖氣立ち、呆れて詞も無かりしが、「ハツア恐るべし〳〵。外面似菩薩內心如夜叉と說かれたる、佛の戒め目のあたり。顏に白粉丹花の脣、粧ひ飾りて菩薩の如く、互に妬む顏もせず、打見には中好き體、心の底に邪鬼執念、絕えせぬ證據をおのれと顯し、かく淺ましき體たらく。

忌はしや穢はしや。妻子は地獄の家土産と、說示されしに疑無し。花の蒼の散つたるに、思ひ較べて觀ずれば、是ぞ好き菩提の種、家國榮華も望無し。迷ふが故に三界の、火宅に心を苦しめり、悟れば十方空ならずや」と、今まで心のめいりし上、いや增りたる發起心、烏帽子狩衣脫捨て給ひ、指添拔いて髻を、ふつつと切つたる輪廻の絆、硯引きよせ書置を、認め給ふ其內に、奥座敷には檢校が、琴の音色もしをらしく、歌の唱歌は聞えねど、彈く爪音は薄雪か。薄き契も過去の因緣、必ず心殘すなと、こま〴〵筆に書盡し、御髻に烏帽子裝束、書置添へて彼所に置き、裏門より悄々と、立出では出でながら、さすが恩愛捨て難く、ふり返つて涙に暮れ、「二人が夢覺めかくと知らば、嘸嘆くらん不便や」と、見遣り給へば蛇形の黑髮、猶も盛んに挑合ふ、執著心に愛想も盡き、身ぶるひ立てて足早に、行方知れずになり給ふ。かくとは知らず監物太郎、立出づれば一間の騷動、見れば件の怪しき姿、驚きながら走寄り、用捨も無く咳合ふ黑髮、指添拔いて切放せば、二人も恠り起上り、顏を見合せ一時に、叶息をほつと吐き給ふ。監物太郎あたりを見廻し、「我君はましまさず、御烏帽子狩衣の、脫捨てあるこそ心得ね」と、立寄り見れば御髻に、一通添へて殘されしは、「はや御逝世か情なや」と、驚き騷ぐに二人も立寄り、「ヤア殿樣は遁世とや、何故の御出家ぞ」と餘りの事に興醒めて、泣くも泣かれずうろう

ろと、倶にうろたへおはします。監物やう〳〵心を鎭め、「ヲヽ驚き給ふは理。先程禁裏より御歸館の節、いつに勝れし御機嫌、あれなる櫻の本にて御酒宴の折柄、御盃へ花の蕚散つたるとて、無明の悟を開き給ひ、さも心細く御意なされしを、打消しては置いたれども、御兩人の髮逆立ち、蛇の如くになつて咬合ひしを、御覽あつての發心か」と、歎くに御臺千鳥の前、亂れし髮に心付き、現ともなく夢ともなく、咬つつ咬はれつ爭ひし、互の覽一時は、どうと轉びて泣沈み、前後不覺に見えけるが、「ア、恥かしきは人の心、此度都見物がてら、お迎に登りしが、千鳥殿と殿樣との睦じさ、見るよりも妬ましく、胸も掻裂く腹立を、じつと耐へてうはべには、美しうつきあへども、寐た間に本心顯はして、淺ましき有樣を、お目に懸けしか、悲しやな。切ては國に殘りたる、石動が大人しく生立つまで、思止りて給はれかし。呼止めてくれぬか」と、歎き給へば千鳥も涙、「けはひ化粧紅鐵漿より、髮形ぞと艷付けて、かた笄よふきあげよと、結揃へしは殿樣に、見限られまい爲ばかり。其髮が蛇とならば、體は鬼にもなりかねまい。見捨て給ふも理ぞや。御出家も皆私が業」「イヤ遁世をさせませし、科人は自よ」「イヽエ私が」「ハテ私が」と、涙漲る繰言に、思案なかばの監物も、袴の襠に淵をなす。御臺所は涙を押へ、「イヤイヤ泣いては濟まぬ事、まだ程遠くはござるまい。追駈けて留めん」と、千鳥諸共立上るを、

「ヤレ待給へ」と押留め、「疾くより某左様には存ずれども、如何程お留め申すとも、最早留り給ふまじ。先は殘し置かれたる、御書置を見給へ」と、一通を差出せば、是非もなく〳〵取上ぐる、涙に聲も顫はれて、しどろもどろの讀癖を、千鳥も倶に差覗けば、「涙ながらに書殘す一通、一、我弓箭の家に生れ、何暗からぬ身なれども、家國を捨て妻子を捨て、世も捨人の沙門となるは、前世未生の佛緣ならん。思計らず降つて湧いたる遁世を、胸挾き女心に、淺ましき姿を見せける故と、嘸かし歎きの餘り、倶に姿も變へたく思ふらん。さにあらず、妻子珍寶不隨者とあれば、死出の旅路は別れ〳〵、伴ふ人もなく、隨ふ者も無く候。とはいひながら、只忘れ難きは石動丸、やう〳〵二歳の時國に殘し、夫より又七年餘り、顔も見ず候へば、嘸成人も致し、大人しくもなりつらんと、思へばいとど懐かしく、忘るゝ事は之なく候。石動丸を傅立て、加藤の跡目を繼がせてたべ。父が此身になり候へば、若しや流浪も致さんかと、是のみいかう案じ候。必ず〳〵歎きに暮れ、悴が事を忘れぬ様、返す〴〵も賴入候。千鳥へも一通を殘さんと思ひしかど、心急かれて候まゝ、此文を一緒に眺め、牧の方に力を付けてくれよかし。云ひたき事は山々なれども、涙に筆も廻りかねら〳〵と」讀みもをはらず三人は、わつとばかりに泣き沈む。監物太郎涙を押へ、「殿の事は歎きても詮なき事、一大事はお家の跡目、若君の御身の上、

殊更隣國には、大内之助義弘といふ佞人あれば、君御遁世なされし事を押秘み、幸ひ歸國を許されし砌、いつもの如く繁氏卿御歸國と世上へ見せ懸け、御臺様に我君の裝束を召させ、一刻も早く國元へ御供して下るべし。跡目の願はお國から。急いで御用意遊ばせ」と、せきたつ詞に歎きを止め、「兎角可きに」と、烏帽子狩衣取上げて立給へば、千鳥の前袖を控へ、「私もお國まで、お供は致す身なれども、お前は石動丸様といふ若君あれば、是に越したる形見はなし、せめて朝夕御身に添ひし、此烏帽子狩衣を、妾に下し給はれ」と、取付くを監物太郎、「御尤には存ずれども、たつた今お聞の通り、御跡目相續の力と致す烏帽子狩衣、此方には進ぜにくし。ハテ何をがな。オヽそれよ〳〵、究竟一の形見有り」と、社の鑰を取出し、「是はあれなる祠の鑰、社の内には其元の、大切になさるゝ形見あり、扉を開いて取給へ。併し爰をよく得心あれ其形見のなりゆきにて、お國へお供は叶はず」と、鍵投出し謎を懸け、御臺所を誘ひて、奥深くこそ入りにけれ。千鳥は一句の判じ物、「御形見のなりゆきにて、お國へ行く事ならぬとは、どうやら物のあるいひかた、譯こそあらん」と庭に降り、社の傍へ立寄りて、何かは知らず開いて見んと、錠前明くれば待かねしと、飛んで出でたる鬼藏人、「ヤレ怖や」と逃退きしが、顔を眺めて、「ヤア兄様か、何故爰に、縛られたはどうした科」と、驚きながら親は泣寄、縛め解け

ば身構へし、物をも云はず驅出すを、「コレ待つた藏人殿、監物太郎が一言に、思合はして思案をすれば、どうでも樣子があるわいの」「ヲヽ云うて聞さう某は、大內之助義弘殿に賴まれ、加藤左衞門繁氏が首を取り、出世の種にするわいやい。爰を放せ」と振切るを、驅塞つて、「待つた待つた。夫で何にも樣子が知れた。夫ならやつぱり縛つて置こもの。此方の樣な惡人と、一緒で無いといふ證據、御臺樣や監物殿への言譯」と、走り寄つて藏人が指添拔取り、手早く眞向切下ぐれば、「南無三寶」と拔合せ、爰を最期と戰ふ太刀音、監物太郎は小陰に隱れ、夫と見ながら詞も懸けず。庭には兄弟修羅の巷、火花を散して、三重切結ぶ。鬼藏人は油斷にて、初太刀に受けし眉間の深傷、眼もくらみ滅多切、此方も手弱き女の手業、數ヶ所の傷によろぼひながら、難無く押伏せ乘つかゝり、念力通すとゞめの刀。監物太郎庭に飛降り、「オヽ健氣なり千鳥樣、御心の操顯れ、疑は晴れたれども、此深手ではもう叶はぬ。心は如何に」といたはれば、苦しげに起き直り、「自とても殿樣の、お情受けし者なるに、樣子に依つてお國へは、叶はぬとありし時、酷い仕方と恨みしが、此しだらでは疑の、懸るは道理、私が因果と、諦めて居まされども、兄弟の惡心故、自づと殿樣に御緣が斷れる、是ばかりが黃泉の障り」と、血汐に染みし五體を投げ、泣く聲奧へ聞えてや、一間の障子押開き、御臺は烏帽子狩衣を召され、悠々と立

出で給ひ、「我こそ假の加藤繁氏、千鳥の前が誠を感じ、二世も三世も變らぬ契」と、のたまへば手を合せ、「嬉しき今のお詞は、我君のお詞より、忝さは百倍」と、につと笑ふが置土産、此世の緣は斷れにけり。「いとしやなう」と御臺の歎き、泣いて歸らぬ愛別離苦。「いざさせ給へ」と引立てて、「頃は薄暮、好き時分」と、せけばせかるる牧の方、力なく〳〵立ち給ふ。形見は跡に心を殘す、著せし人は變れども、變らぬ烏帽子狩衣、假の浮世に迷はじと、悟り〳〵て出でたる主は、直に金色菩薩の位、歎き給ふな歎かじと、悟れば果敢なき花の宴、散りにし姿を殘し置き、本國にこそ立歸る。

第三

富んで奢らず貧しうして貪らぬは未可なり、富貴にして禮を知り、貧しうして樂めとは、弟子に示せし孔子の詞。大內之助義弘威勢九州にはびこり、自ら武運を朝日にたくらべ、橫雲將軍と尊號し、人もゆるさぬ高胡床、浮べる雲の上見ぬ鷲、明日は我身もしらぬひの、筑紫の御殿と時めきける。伺候の諸武士も自ら、伸し上つたる大名形氣、中にも近習の關口隼人、御前に進出で、「豫て仰渡されし通り、近國の大名より、家々に傳はりし重寶、今日獻上致す筈、則ち

寶見分の役は、多々羅新洞左衞門と承る。夫につき彼が娘、お國に稀なる美人なれども、如何なる事か終に男の肌觸れず、生れのまゝなる生娘と、諸家中の風聞故、御手廻りの召仕にと存じ、上意と申してお次まで、呼寄せ置き候ひしが、御慰みに御覽もや」と、何がな御意にいらざる追從、お髭の塵を取りかける。義弘寬々と打頷き、「勅諚と僞り、諸國の寶を集むるは、某が謀叛一味の證、連判狀も古めかしく、氣をかへて人質の代にする家々の寶、まだ受取るには時刻も早し、其間に彼娘、ちよと顏を見ん。それ〳〵」と、仰にかくと云次げば、頓て御前に立出づる。世にすねて男選みに年長けし、新洞左衞門が娘ゆふしでは、終に殿御の肌知らぬ、おほこと見えぬ洒落姿、髮の結目にさしたるは、梅花にあらぬ白羽の鏑矢、笄ならで簪か。「なんの御用でお召ぞ」と、案じる內も面はゆく、お書院近く坐しにけり。橫雲將軍遙に見やり、「ゆふしでとはおことよな。ハレ見事、好い器量のの。汝が親の新洞左衞門、忠と義とに固りし心より、かたくなに育てられ、麻につるゝ蓬とて、其方までが身持も堅く、一度も男に肌觸れぬと聞及ぶで器量といひ風俗まで、あつたらしき日蔭の花、殊更男選みとあれば、疑もなき手入らずの大無垢、水上は此義弘、今宵から抱いて寢る」と、ほやりと笑ふしほの目は、仁王の戀する如くなり。ハッと思へどゆふしでは、態と額を疊に付け、「私風情の賤しき女、お寢間のお

伽致せよとは、有難い事なれども、御臺樣の思召、一家中へ聞えても、女旱は行くまいし、家來の娘をわつけもないと、我君を笑はせますも如何、此儀は御免なされませ。ほんに誓文、殿樣を、微塵も嫌ひは致しませぬ。慮外も厭はずつべこべと、お詞背くも君が爲」と、辭義する詞の控綱、斷れもやせんと案じ居る。「ホウ、此義弘がいひ出す事、二言と詞を返す者、恐らくは覺えず。女に稀なる大膽者、出來したりさりながら、一天下の主となる某、十二人までは女房持つても苦しからず、否でも應でも妾にする」と、深くみいれし鰐の口、遁れる丈と手をつかへ、「冥加に餘る御意なれども、私はちと譯あつて、一生男に肌觸れて、身を穢す事ならぬといふ、申譯は頭にさしたる白羽の鏑矢、細な樣子は父上に、お尋ねあれば知れる事」と、いふに差出る關口隼人、「ハヽゆふしで殿惡い合點。殿樣に惚れられるは此方の爲に福德の三年目、忝いとお受け申すが上分別、親御も浮み上る事。其頭に插いて居る白羽の矢が邪魔になり、仰向に寐る勝手が惡くば、デエ拔いて進ぜん」と、立寄るをむつとせき上げ、「こりや何爲やる」と突飛ばし、「親新洞左衞門が御前に居ねば、高なしの我儘。男持たぬはどういふ譯やら仔細も知らず、親までが浮み上る、いや果報ぢやの福德のと、慾に穢れた土根性。そんなむさい女子ぢやと思やつたら當が違ふ。マヽ、慮外ながら、サヽ手は愚。其方の延びた鼻毛の先でもさへて見や、赦しはせ

ぬ」と膝立直し、睨みつめたる理窟詰、云込められてしかなの隼人、手持無沙汰に尻ごみす。義弘居丈高になり、「小ざかしき女め」と、肩先摑んで引摺り寄せ、「女ろの餓鬼は十二三から、男を見ればぴろ〳〵と、前後を見る當代。察するところ内證に隱し男を拵へ置き、其男への心中立、外の矢先は通さぬと云ふ心で、起請の代に此鏑矢、さして居るに違はせまい」と、矢を掻拋つて引起し、「サア不義者めが、名を吐かせ」と、責問はれてもゆふしでは、元とり覺えなみだ聲、「コハ無體なる御尋、私も木竹の身では無し、惚れてくれる殿御があれば、欲しう無うて何とせう。持つに持たれぬ譯あつて、脊丈延びた此年まで、人の數にも入らぬ身を、不便なともおつしやれず、酷いお主の心やな。さら〳〵不義の男は無し、疑晴れて給はゞ」と、身を悔みたる恨泣、涙片手に詫びければ、「ヤアまだ男めを庇ひ居る。よし〳〵云はせ樣あり」と、口にはいへどさすがは戀、目顏で嗾し立つたり居たり、身悶えすればお次より、「ヤレ待ち給へ」と聲懸けて、立出づるは新洞左衞門、顧み返りし天のじやき、隼人はお座にたまりかね、「老人の御苦勞に、惡い所へ好うお出で、それに緩りとお遊び」と、云捨てこそ〳〵逆げて入る。娘を引退けどつかと坐し、「不義の相手が聞きたくば、某が申上げん。娘が隱し男は、辱くも我朝の神の司、天照皇太神宮、何と膽が潰れますか。したが、恁うばかりでは合點行くまい。コレ殿、耳

を浚へてよう聞かしやれ。此お家大内の御先祖、伊勢兩宮を當國へ御勸請なされ、その社より一人づつお座子を取り給ふ、印には家の棟へ、不思議に白羽の鏑矢立つ、其役を勤めた我娘、一旦神に仕へし女、一生男を持たすまいと、誓の爲に神明の鏑矢を、頭にさゝせて不淨を拂はす、それを無體に拔取つて、妾にするの足懸のと、罰をかぶる御合點か。其上是まで、頤の、かいだるい程諫めても、聞入の無い謀叛の企、今となつて異見せぬは、所詮いうても得心は召さるまい、ハテ毒喰はゞ皿祇れと、諦めてする奉公。ろくだまに望も達せず、榮耀らしい妾狂ひ、まだ早い、措き召され」と、病犬の咬付く如く、唯一口にわんとばかり、膠もしやりも無かりけり。性急なる大内之助、耐へかねてすつくと立ち、ゆふしでを宙に提げ、元の處へどうど投げすゑ、「扨はいよ〳〵推量の通り、親め俱に呑込んで、內證に男があるな。我心に隨はぬ腹癒、眞二つに打放し、其男めに鼻明かせん」と、大太刀するりと拔放せば、わるびれもせず押直り、「父まで深きお疑ひ、曇無き身は天道が正直、お手に懸るが申譯」と合掌したる健氣さを、見やりもせぬ片意地親爺。「サア今こそ」と義弘は、父が顏を差覗けど、びつくともせぬいがみ面、「サア〳〵〳〵」と二度三度、嚇しの刃を振上げ〳〵、閃かしてもきよろりがみそ、「テモ扨もしぶとい奴等、エ、是非もなし是まで」と、既に危き太刀の下、「ナウ待つてたべ誓く」と、大內の

御臺走出で、「重々のお腹立、御尤とは云ひながら、戀ばつかりは嵩押に、云ふ程埒の明かぬもの、自にお任せあらば、何とぞ勸めて今日の内、お前の心に靡きやる樣、私が世話を致しませう」と、すかし宥める物ごしに、貞女のしるし顯せり。戀は曲者鬼にも涙、「情强きとちめらう、打殺してしまはんとは思へども、成れば又拾物、少しの間お身に預ける、返事が遲いと赦さぬ」と、詞の弛みに御臺は心得、「たつた今好いお返事を、お氣遣ひ遊ばすな」と、ゆふしでを引立てて、尾を踏む心地虎の間へ、伴ひ入らせ給ひけり。跡には主從物をも云はず、彼方は澁面此方は工面、睨合うて居る處へ、「國々の諸侯より、寶を持參」と呼はる聲、俄に繕ふ大將の、衣紋美々しく座を占めて、待つ間程無く入來る、青貝の卓恭しく、目八分に差上げて、二つ竝べし珊瑚の枕、「是は菊池の陶全姜が、寐た間も放さぬ重寶なれども、勅諚とあれば力無く、持參致し候」と、廣庇に押直す。次は豐後の友方大學、水晶籠を臺に据ゑ、「此籠はその昔、晉の國より渡りし寶、庭に懸くれば風を生じ、自然と雨を降らしつゝ、暑氣の時分は冷やりと、西瓜もとき夕立もとき」と差上ぐる。扨其次は肥前の國、海月式部が重寶に、白龍石といふ硯、「墨磨る度に硯より、己と水を涌出す、不性者には第一の寶なり」とぞいひ上ぐる。其外松浦五島の一族、筑紫表の國主城主、皆家々に傳はりし、名物寶を臺に据ゑ、廣緣狹しと竝ぶれば、

見分の役人は新洞左衛門、腹は立てども其日の役目、ふしやうぐ〳〵に見改め、「孰も寶に相違無し。誰かある此品々、御藏の内へ納めよ」と、呼はれば伺候の武士、てんでに捧げ入る體に、先は首尾好く納まりしと、諸國の城主も安堵の胸、皆々旅宿に立歸る。遙に下つて筑前の城主繁氏の執權、物に騒がぬ監物太郎、寶も持たで悠々と、白洲の庭に入來るを、義弘つくぐ〳〵打まもり、「九州の大名より、殘らず寶を差上げしに、加藤の家より何として寶は送らぬ。宣旨を背くか但しは氣儘か、返答せい」ときめ付ければ、ちつとも動ぜず、「御尤の御不審、勅諚とある上、いかで違背の候ふべき。併し筑前は小國故、差上ぐる寶は無し」と、いひも切らせず、「さうは云はせぬ。大名の家に寶無くて、家督の繼目は何を以て規模とする」「イヤ我國は仁義禮智、五常を寶として國家を治むる。但し此お國には、器財を以て寶とし、君子の教を寶とはなされぬか」と、理窟を詰めて云ひ込むれば、元より不才の大内之助、返す詞も無き所を、耐へかねて新洞左衛門、目玉を剝出し、「コリヤ〳〵監物、夫は唐土臨潼の會に、善を以て寶とすと、伍子胥がいひし口眞似、喰はぬ〳〵。加藤の家には齊國より渡りたる、夜明珠といふ名玉ある筈、今玉女神と神に仰ぎ、尊敬する事紛れ無し。是非玉を渡さずば、大軍を以て押寄せ、家國共に奪取る」と、退引させぬ手詰の難題、此場を遁れて分別と、無事を繕ふ當座の請合、「玉女神を

夜明珠と御存じなれば力なし。成程寶珠を渡し申さんさりながら、年を數へて二十と限り、終に男と肌觸れず、交合の道を知らぬ女あらば、玉を迎ひに越さるべし。若しも年に過不足あるか、一度でも男に肌觸れ、身の穢れたる女の手に携へ持てば、忽ち玉の光を失ひ、石瓦の如くとなる。其割符の合ふ女があらば何時でも、玉を渡すに相違なし。某は先お暇」と、立歸るを、「待つた〳〵、使の女是にあり」と、走出でたるゆふしでが、御前に向ひ頭を下け、「不義の男があるゆゑ、晴心に隨はぬとのお腹立、其お疑晴らすため、終に妹脊の道知らず、身を穢さぬといふ申譯、此お使を私に、仰付けられ下され」と、思入つてぞ願ひけり。監物太郎もぎよつとせしが、「コリヤ〳〵、身の穢れぬが定ならば、いかにも玉は渡さうが、見事寶の見分するか」と、何がないうて困らす思案、「ヲヽ、氣遣ひすな、其見分は此新洞左衞門、娘に連立ち行くからは、贋物は摑まぬ〳〵。シタガやいゆふしで、其方には惚れた人がある、此方の體は清淨でも、他から穢を添ふるといふもの。ソレ其和郎が思斷るとお云やらねば、使には行かれまい」と、戀慕の絆を斷らせんため、大内が耳に打て響けを、聞流して不興顏、返答も無く座を立つて、駈込む向ふへ御臺所、立塞がつて、「申し殿樣、女一人に繫がれて、大切なる夜光の珠、此度受取り給はずば、禁裏表の首尾も如何、ゆふしでをさつぱりと、思斷つたる證據を見せ、使を仰付

けられよ」と、彼方此方でせこめられ、當惑したる大内之助、何思ひけん振返り、後に懸けたる弓押取り、件の鏑矢引番ひ、「命に替へて某が、思込んだる戀なれども、大望成就の妨げなれば、此戀ふつ〳〵思斷る、證據の鏑矢受取れ」と、切つて放せば松の木に、はつしと立つたる有樣を、ゆふしで悦び走寄り、矢を抜取つて押戴き、「此お使を爲果せなば、枕一つで二十まで、ねゝした事を世上へ言觸、君の心も晴々と、曇らぬ女の鏡にせん」と、帶引緊める親子の勇み、監物太郎を先に立て、白羽の鏑矢、髻に、插しかざしてこそ　三重定め無き、世を憂き事に見限りて、遁世ありし繁氏卿、歸國と偽り石童を、跡目に立てて監物太郎、國家を治むる智仁勇、三國名譽の夜光の珠、玉女神と勸請し、秋の最中の祭日に、館賑ふばかりなり。御臺牧の御方、石童君を伴ひ、廣書院に出で給へば、執權監物が女房橋立、神事の祝儀申上げ、「夫監物太郎、大内義弘の招きに依つて參られ、御寶の御神事に外れし段お赦し」と、斷り申せば御臺所、「心善からぬ大内の呼寄、我夫の行方は知れず、石童は幼少なり、何云越さんも計られず。只懐しいは繁氏卿」と、卿ち給へば石童君、「母樣氣遣ひ遊ばすな、追付父樣の有所を尋ね、私が迎に參ります」と、大人しやかな諫には、涙も止る折からに、國一番の濡男、其名自然と女之助、兄監物が勘當受け、詫を賴みの奥書院、うぢ〳〵として入り來る。御臺は何のお心無く、「珍しや

女之助、此程若も尋ねしが、何故登城召されぬ」と、仰にハツト頭を下げ、「私儀不行跡故、兄監物太郎が勘當受け、それなる橋立殿を賴み、樣々詫びれど聞入れ無く、是非に及ばず今日は、若君樣や御前樣の、お詞をかる所存、恐れながら然るべう、賴上げ奉る」と願ひを聞いて御驚き、「テモ扨も、堅い其方が何越度、軍法祕密の論議でも、しやつた上のいさかひか」と、尋ね給ふを傍に聞く、橋立は吹出し、「御臺樣の、彼の人を堅いとはお目違ひ、其柔かさ自墮落さ、軍法論議はさて措き、女中論議で家中は大もめ。お上にも御存じの、前の內儀お埒殿は、夫監物太郎都より貰ひ歸り、夫婦に致され、退引ならぬ女房を、子持になると乳臭いとて離別して、お物師のお縫殿とちん〳〵。夫も續かず、弓頭の娘おつるを娶り、持つと往なして、お妙の長門殿。夫から仲居お茶の間の、白髮交りも色めいて、其處では悋氣此處では喧嘩、何から起れば女之助、私が夫ぢや殿御ぢやと、云募つて大騷動。堅い夫が面汚しと、勘當せしも無理ならず」と、語れば御臺も興醒顏、若君何の差別なく、「女之助はいかい苦勞、それから其喧嘩の仕舞、どうなつたぞ」と、根問にほつと行詰り、「其ソノ跡の儀は、面目もなき仕合」と、誤り入りし風情なり。御臺もをかしく、「若氣の至も餘り興がる、以後は嗜む心なら、俱に詫して得さすべし。幸ひ今日は御玉の祭、玉女神の御前にて、金打させん此方へ」と、立入り給へば「有難し」と、

石童君を御供し、奥を指してぞ入りにける。程無く歸る監物太郎、大内が難題胸に釘、打つて變りし思案も無く、廣間へ通れば妻の橋立、「義弘よりの呼寄、如何なる事ぞ心もとなし、及ばずながらお聞かせ」と、尋ぬれば、「さればの事、大内義弘は都の勅と僞り、近國他國の寶を集むる、是正しく謀反の下拵へと見抜きし故、我國には寶無し、仁義禮智信の五字を以て寶とすと、伍子胥が辯をかつてまんまと云伏せしに、多々羅新洞左衛門と云ふ奴、夜光の珠の來由を知つて、汝が家に玉女神と崇むるは、齊國より渡りし夜明珠、寶無しとは云はせじと、明白の一言、爭ふにも爭はれず、成程其寶あり、併し尋常の者たづさはる事叶はず、二十と限つて交合せざる女あらば、受取りに越されよ、男女の別知つたる者が手に觸るれば、忽ち珠の光失ふと、言傳へを難題に、當惑させんと思の外、かの新洞めが娘當年一十、まだ是まで不犯にて、此役目を乞ひ請け、親子連にて受取りに來る筈。代々加藤の家の重寶、渡さば家滅亡、厭といはゞ大軍を以て攻來らん。さすれば御臺若君のお命も危し。兎やせん角やと胸はどうづき、思案も有らば云うて見やれ」と、語るを聞いて女房は、ほつと溜息吐きながら、「只此上は贄物を、急に拵へ渡さうより、外の事は」と云ふを打消し、「イヤ〳〵其儀も思付けども、うつかりと受取る新洞左衛門にあらず、ハテどうがな」と大ずるの、骨も碎くる一思案、及ばずながら橋立

も、智慧の袋の棚捜し、暗がりさがす如くにて、暫し途方に暮れけるが、「イヤ申し、かやうな時は膝とも談合と申します。幸ひ弟御女之助様、勘當の詫にお出で、機嫌直され倶々に、御相談は」と、いふに暫く工夫を運らし、「ム何、弟の放埒者、奥へ參つて居るとな。ホヽウ好き相談對手、思付あり女とも、汝も來れ」と立上る、心知らねど橋立も、夫の詞を力草、伴ひ一間に入りにける。暫くあつて「大内よりお使者」と呼はる聲につれ、月と雪との眞中に、花と眺める後帶、男選みのゆふしでが、かた笄の濡髪に、さいた白羽の鏑矢は、伊達か僭上か風俗も、しとやかに立休らひ、「誰そ賴まん」といひ入るよ。かよる對手に相應の、女房選みの女之助、「いざお通り」と云ふ内も、思ひ含ます目遣に、可愛らしさが身にこたへ、互に顔を見交して、上座へ通れば橋立が、やがて出迎ひ頭から、しつぽりむきの挨拶にて、「是はゝ〳〵女中の、御苦勞にようこそお出で。自は監物太郎が女房、橋立と申す者、又是なるは主の弟御、女之助と申して、武道は勿論歌の道、戀の道、竝ぶ方無き優男、則ち今日の御馳走役、御用あらばあの人へ」と、猫に鰹の引合せ、如何な釋迦でも精進を、落ちても見たき心なり。女同士こそ此方もにこやか、「テモいかいお心遣ひ、私はゆふしでと申して、まだ人數にも入らぬ女、かやうな役に參る筈は無けれども、人好あるお寶物、親新洞左衞門はお次に控へ、マア其方が受取つて來いと、不相

應な役目を受け、案じ〳〵參りしなり、事なうお渡し下され」と、詞の中より、「何が扨、お渡し申さいで何とせう。夫も只今罷歸り、お藏の掃除、暫くお隙が入りませう。ヤ幸ひ今日はお玉の祭、神前へ供へしお神酒頂戴遊ばし、不淨を淸めお受取り。それ〳〵神酒」といふに任せ、對の德利を三寶に、下女が携へ差出す。女之助近く差寄り、「敵を招いて毒酒を盛り、約を變ぜし例もあれば、毒味致して進ぜう」と、神酒を兩方つぎあはせ、土器に十分と受け、つゝと乾してゆふしでに、「頂戴あれ」と獻しければ、「是は御念の入りし事、緣につれたる神の酒、何お疑ひ申さん」と、一つ受けて飮む酒の、忽ち五臟に浸渡り、亂れ懸りし顏の色、行儀も崩れ土器を、女之助へ差戻す。サアしてやつたと橋立が、態と咄も打解けて、「近頃卒爾な事ながら、頭髮にさゝれし白羽の矢は、如何なる故ぞ」と尋ぬれば、「是こそ私が殿御を持たぬ申譯、幼き時此白羽、家の棟に立ちしより、神のお伽のお座子となりしは幸ひ、よい男好いた殿御のあるまでは、人目の關の此白羽、片時も放し候はず。あはれ此矢を貰ふ氣な、お人があらばやりたし」と、女之助が傍近く、にじり寄りたる亂れ咲、花ならば折れ、折る人は、主樣ならでと絞り寄る。爰ぞと俱に摺寄りて、抱著く程に思へども、傍に見て居る兄嫁の、手前を恥ぢて薄紅葉。高を締めたる橋立が、傍から焦つて、「それ其處を、じつと引寄せ引繋めて、二世の堅めが

是迄の、不義徒のかへり花、仇花ならば御無用」と、そやし懸ればゆふしでは、「テモ粋な兄嫁御、悪性男を私が手で、こなして見せうがくだんすか」「仰に及ばず互の縁づく。したが口先ばかりにて、どうのかうのは皆浮氣、誠をいはゞあの一間、其氣が無くば措かんせ」と、はりかけられて、「イヤ申し、戀は親にもお主にも、見かへてするが女の意地、跡へは寄らぬコレごんせ」と、女之助を引立てる。是ぞ工の臍落と、思へどどうやら恥かしく、尻込するを橋立が、「鬼も艱めば人喰はぬ、入らざるお辭義」と無理遣りに、手早く跡より押しやつて、一間をぴつしやり閉すとはや、内陣ひつそとしづまれば、繻子の帶鳴るばかりにて、物靜にぞなりにける。橋立四邊見廻して、女之助の放埒も、禍三年時の用、仕果せたりと思ふ所へ、多々羅新洞左衞門、生付いたる氣は苛ち、待久しくて次の間より歩出で、「コレ女中、娘は寶珠を受取つたか、まだかどうぢやぞ聞いておくりやれ。べら〳〵何して居る事ぞ」と、膨れ返つた髭面を、引延ばさんと橋立が、やがて床几を參らせて、「誰そ黃盆お茶持て來い」と馳走振。「イヤ茶は喫べぬ煙草は嫌ひ、滅多に馳走召されても、受取る物に遠慮は無いぞ。床几は役目、恩には被ぬ」と、腰打掛くる其内にも、橋立は一間の首尾、如何と思ひ立ちつ居つ、狼狽へ廻るを、「コレサ女中、きよろ〳〵と何しめさる。待ちかねて烏帽子首、強ばり申す、と云うてくれめせ。但しは直に

行かうか」と、立上れば、「ア、これ申し、今が祭の最中」「ナニ祭とは」「イエイナ、かの夜光の玉のお祭」と紛らかし、隙取る手段に傍へ寄り、「お家の祭は、先最初が鼻高、其鼻の長さが三間半、男にしたら廢り者。次が御輿と提灯、其提灯が餅搗いて、事の埒が明かぬかと、いかう私は案じます」「ア、これ、神事の咄聞きには參らぬ、御玉ばかりを受取るに、かやうの隙入合點行かず」と、睨み廻せば、「オ、けうと、輕はずみに何ぞいな。玉といふに愚は無く、唐土には卞和が璧、我朝にては驪龍の玉、伊勢の國にはお杉とお玉、飛んだは人魂怖いは日の玉、下女の玉でも輕々しう、受取らるゝものかいな。マアお前はお幾つで、お名は何と申します」「ハテ面倒な事を尋ねる、名は新洞左衞門年は六十」「シタリ」「何ぢや」「テモ扨も〳〵、さつても若いお顏の」「ア若うござる」「お耳も聞えお目も好いかへ」「耳も目も好ござるてや」「お齒はへ」「夫も好いてや」「サア其好い内から人は養生、折々疝氣も出ようがな」「ハテ出ようと儘さ」「イエイエ、さう氣を苛つかいかいお毒。それ〳〵頭によつぽど白髮、デエ、抜いて上げましよ」と、立寄れば突飛し、「エ七面倒な女め」と、傍に立つて大聲上げ、「ヤア〳〵娘、夜光の珠を受取りしか、何して居るぞ」とつかうどに、呼はる聲の響きてや、心靜に寶塔を、携へ出づるゆふしでが、跡に續いて女之助、出づるや否や尊敬し、「忝くも寶塔の、内に籠たる御玉は、闇を照す

こと日輪よりも明かなる故、夜光の珠とはなづけたり。斯程貴き御寶を、輕々しく受取られし、ゆふしで殿は仕合」と、挨拶すれば、「皆是お前のお世話ゆゑ」と、表向なる互の辭義。新洞左衞門笑壺に入り、「ホヲヽ娘、寶を異議なく受取つたか。出來した〳〵。併し某見分の役、改めるため拜禮せん。孰れも倶に拜まれよ」と、云ふに隨ひ女之助、橋立倶に頭を下けて、ハットばかりに敬ひ居る。ゆふしで心に信を取り、「何方も珠の御威德、拜み給へ」と寶塔を、開き見すればこはいかに、まつ黑々と黑玉の、墨をつくねし如くにて、是はとばかりゆふしで親子、女之助も橋立も、倶に呆れし顏付にて、暫し詞も無かりしが、新洞怒つて、「ヤア大盜人の監物太郎、改めずんば贋物を、持たして歸すたくみよな。イデ寶藏へ踏込み、攫んで來ん」と、駈行く向ふをさつと明け、內より飛出る監物太郎、贋をくろめの白々しく、「コリヤ〳〵新洞、先達ていふ如く、不淨の女が受取らば、玉の光を失ふと云ひしは爰ぞ。其女に詮議が懸つた。其處退け」と、打つて變りし詮議のうら釘。いがみ懸つて橋立が、「コレゆふしで殿、身に覺あるならば、有りやうに白狀あれ。一間の內で不義がましい、淫な事は無かりしか」と、まざ〳〵しけに問ひかけられ、何と言譯ゆふしでが、すべき樣無く髮に插す、白羽の矢をば拔くとはや、矢の根を咽に突立つる。是はと驚く人々より、半狂亂の新洞左衞門、抱擁へて、「コリヤ娘、わり

や何故に自害する。言譯無くば無いやうの、思案も有らうに情ない。大事の娘を殺すか」と、さしもに猛き武士の、子故の闇に目も暗み、だうと坐りて泣居たり。今を限りのゆふしでが、涙片手に、「ナウ恥かしや。自は此お館へ來るよりも、さるお人をば思初め、情の道に迷へども、大事の役目と心の駒、繋ぎ留めしを情なや、御内寶のもてなし酒、あれなる神酒を飲むよりも、不思議や五臟に浸渡り、大事を忘れ何のその、まよの上にはり持たされ、つい下紐を解きそめて、是非なく身をば穢せしぞや。言譯ならぬいたづらを、詮議に逢うて恥かいて、かく成りゆくは神の罰、神明怒りの鏑矢に、射殺さるよと覺悟して、死ぬる心の悲しさを、推量して」と泣く涙、袖に餘れば血に染みて、見る目もいとど哀なり。樣子を聞いて新洞左衞門、すつくと立つて走寄り、娘がいひし神酒德利、兩手に摑んで、「ヤアラ心得ず。もつとも若氣といひながら、左程亂るゝ娘にあらず。仔細は此中、顯はさん」と、緣のかまちに打付け〳〵、打割る中より守宮のつがひ、顯れ出づればしつかと捕へ、「扨こそ〳〵。唐土張華が博物志に、交合の守宮を引きわけ、酒に浸して其氣を呑ませば、忽ち女の心亂すと書きあらはす。其理を知つて娘に呑ませ、性根を亂しいたづらさせ、身が穢れた故光失せしと、科をこつちへ塗りつけて、贋物渡す下ごしらへ。扨たくんだり拵へたり。憎さも憎し不義の相手、是へ出せ、ずだ〳〵に、

ためして胸を晴さん」と、三寸魚板見抜きし兩眼、睨付けてぞ詰寄する。ちつとも臆せず女之助、「其不義の相手は某、御存分」と押直る。「ヲヽ好き覺悟、觀念」と、振り上ぐる劍のかげ、「ナウこれ待つて」とゆふしでが、苦しむ體に氣も弱り、心も折れてせん方も、なくより外の事ぞ無き。苦しき中にも親の顔、じろ〳〵と見て、「おいとしや、親一人子一人の、私に別るゝお前の心、悲しい上にお腹も立たう。さりながら、假令守宮のわざならずと、一寸見るから思初め、心が先へ穢れたもの、帶紐解かずと御寶の、光失せいで何とせう。假の契も二世の緣、枕交はせばわが殿御、聟は子といふ世のならはし。私が死んだ跡にても、形見と思ひ懇に、おいとしがつて下さんせ。お主樣も父上を、親と思うて折節の、訪ひ音づれを賴みます。親に先だつ我心、推量して可愛やと、思うて一言未來まで、夫婦と云うて下され」と、しやくり上げたる哀さを、見るに身に沁む橋立が、せめての事と介抱し、「萬事を胸で諦めて、詞に出ねど心には、嘸みづからが憎からう。言譯するにもしられぬしな、皆是前世の約束と、思ひ諦め給はれ」と、歎けば俱に女之助、「是まで盡せし惡性の、とゞめとなつた今の悲み、未來は扨おき後々萬劫、契は變らじ夫婦ぞ」と、云ふ聲耳に經陀羅尼、物も得いはず嬉しけに、合す兩手が暇乞、あへなく息は絕えにけり。わつと泣出す新洞左衞門、地團駄んで、「ヘエヽしなしたり情なや。我堅意

地な心から、一生夫は持たさぬと、云うたを誠と思詰め、あへない最期を遂げけるよ。未來で夫婦と悦べども、悲しむ親が此世から、夫が見えるかたはけ者。思出す事ばつかりを、いうて死なずと便無き、此身を早く迎うてくれ。六十越して子に離れ、何を頼みの娑婆世界、情なの我身や、不憫な娘の最期や」と、しやくり上げたる一徹涙、堤も切れて大川に、泥の淵なす如くなり。共に哀と人々の、歎きの内に監物太郎、彼寶塔を目通りに据ゑ、女之助を引直し、「汝このごとく光を失ひし不義の相手、討つて渡す覺悟せよ。サア新洞受取られよ」と云ふ聲に、涙拂うてすつくと立ち、「ヤア人そばへすな其手は食はぬ。義理立てせば助けうと思ふか、いつかな〳〵。眼前娘の敵人手は頼まず、我手に懸けて眞二つ、恨を霽す。其處退け」と、飛びかかつて抜討に、はつしと切つたは件の名玉。是はとばかり人々は、呆れて詞も無かりしが、女之助聲を懸け、「手が廻りしか新洞左衞門、急かれずともサア首」と、差付くれども目に懸けず、切割りし玉引摑み、「己陰陽和合を嫌ひ、よう光失うて、娘に自害させたなア。我子の敵思知つたか、加藤の家の名玉は、目利の目からは悉皆藍玉、持つて歸り主君に見せ、恥あらはして腹癒てくれん。必ず跡で其玉は、贋物なと手ふな。眞の贋があるならば、石童や御臺に持たせ、早く此家を捨てさせよ」と、いひ敎へたる詞の裏、表は怒り心には、せめて娘が手向とも、な

れよと懸ける情をば、袖に隠して立帰る。折よしと御臺若君、駈出で給へば女之助、「新洞が詞の端、御兩所の身の上氣遣ひ。幸ひ我君高野に御座あるとの風聞、夫を力にお供せん。いざさせ給へ」と勸立て、伴ひ出づれば監物太郎、「ヤア待て弟、汝生れついて好色者、未だお若き御臺所、預けやる事覺束無し」と、いふよりやがて守宮を引裂き、滴る血を腕へ塗付け、「是見給へ兄者人、守宮は不義を勸むれども、其血は却つて不義顯す。唐土秦の始皇、三千人の宮女に不義あらんかと疑深く、殘らず臂に是を塗る、不義ある者は忽ちに、落ちて跡無くなる例、さるに依つて守宮といふ字を、宮女を守るといふ心で、宮守りと書傳ふ、我朝にては萬葉集、脫ぐ沓の重る事のかさならば、守宮のしるしかひやなからん。沓重りてさへしるしは落つると詠みし歌、まして三代相恩の、お主に對して不忠不義、天命いかで」と云はせも立てず、「ヲヽ出來した、行け」と一言が、兄の情の餞や、御臺若君立別れ、高野の山の峯にある、我夫諸共歸りこんと、つらね給ひし言の葉も、それはまつとしまつまでは、「お名殘惜しや」と橋立が、駈寄るを押隔て、互に「さらば」「おさらば」の、聲を力に忘れ草、伴ひ館を出で給ふ、くにに思や殘るらん。

第四　道行越後獅子

唄 踊り來て、是の大門眺むれば、エイソレ七里、大もん花でかゞやく。花を見捨てて憂き事に、憂きを重ぬる玉鉾や、繁氏の御臺所、石童丸の御手を引き、女之助が御供にて、君は高野にましますと、夫を力の忍草、笠にはあらぬ越後獅子、習はぬわざに太鼓笛、吹くや追風に帆を上げて、國を出船の日和も好く、はる〴〵きの路かだの浦、あがる朝日に摺れ違ひ、爰より歩行の草鞋がけ、沖の鷗におき別れ、誰かまつ江と聞くからに、辻占よしといそ〳〵傳ひ、跡に心は殘らねど、引戻さるゝ砂道は、歩めどはかの行き惱む。けにや世に在る身なりせば、名所古跡も訪ふべきに、今は耳にも目にも見ぬ、小家がちなる軒のつま、煙賑はふ峯々に、霧立ちのぼる絶間より、ほころび出づる山々は、野飼の牛の口を執る、草刈童の月代に、似たぢやないかと高笑ひ、似たは化けたか狐じま、睫毛ぬらせる袖の霧、松に殘りし嵐と共に、野邊の草葉もかれ〴〵に、いつも變らぬ冬景色、落葉も霜に埋れて、木の下蔭の寂しきは、在所離れて北島の、渡り急ぎし舟呼ばひ、川の流れに水鳥の、羽を伸す音に驚きて、人目防ぎと舞ひ奏で、櫻木踊の拍子とり、唄 櫻木を、枝にふきわけ門に立て、門の光で庭も輝く。さくらぎ、北山の

櫻のやうなる、殿がな女郎がなと、歌ふ聲さへ和歌の浦、こゝは寡婦のかたをなみ、お茶は摘まねど都にまがふ、所の名さへ宇治と呼ぶ、月を慕ふか雨を招くか、ろはんにあらでかけづくり、お宿〳〵と招かれて、「まで日は高い、先が急ぐ」といひ捨てて、逃げて、のがはの觀世音、歩みながらに遙拜し、齡を祈る松島や、千代に八千代に、さゞれいはでを跡になし、ふりかへり見る故里は、あれかあそこかあの邊りかと、空にしるしのかひも無く、みだれ、みだれみだるる白雲の、風に誘はれ鐘の聲、はや入相に、程は長田の里つゞき、誓を頼む粉川寺、惠もふかき法の友、胸に木札の順禮も、願ふは二世の道しるべ。我々とてもあの世まで、伴ふ主の御在所、尋ね三谷を過ぎゆけば、高野も近し我君に、やがておほづと聞くや嬉しさに、道を急いでしやな〳〵と、紀の川上にぞ　三重つき影に、光を添ふる法の道、高野山の繁昌に、つれてはびこる麓の里、かぶろの宿の賑はしさ。都方より參詣に、鄙の道者もうち交り、泊競りあふ旅籠屋の、內騷がしき黃昏過、同じ浮世に人忍ぶ、身はならはしよ旅の空、筑前の三人も、宵よりこゝに假の宿、笠も草鞋もとく〳〵と、寐られねまゝに御臺所、石童丸の御手を引き、障子を開いて次の間へ、立出で給へば女之助、跡に引添ひ歩みいで、「誠や人の盛衰は、定め難しと申せども、繁氏卿御在國ましまさば、錦の褥に御身をそへ、透間の風も防がんに、かく淺まし

き旅泊の轉寐、いたはしさよ」と頭を下ぐれば、共に悄るゝ涙を隱し、「我々親子が苦勞より、若い其方が心遣ひ、長の旅路を主なればこそ、忝いぞや嬉しいぞや。死んでも忘れはしませぬ」と、のたまふ顔の艶やかさ。旅疲でさへアノ御器量、さて美しやと思ふより、ふつと目の著く煩惱心、例の持病の好色が、ほに現れて、「是はしたり、改つたおつしやり樣、忠義といふは付けたり、長々の道中を、お前樣のお供して、何の苦勞に存じましよ。我君の御座ると風聞する、高野山へはもう四五里、明日はたしかにお逢ひなさるゝ。さぞ明晩はしつぽりと、久々の溜水、人目堤の切れ口を、御用心あそばせ」と、仕懸けて見たる問藥、己が病に配劑の、加減は常の如くなり。「マアあの人のつがもない、たとへ夫に逢うたりとも、御出家の御身なれば、其樂みは斷れてある。只歎くのは國の騷動、大內を亡し、此若を世に立てる御相談、一先國へお供して、立歸りたい心の願」「若し其上の御得心、還俗でもなされたら」「ハテ其時は」とばかりにて、袂溢るゝ靨には、いとゞ思や增るらん。媚く詞を付け込むしれ者、じり〳〵と傍に寄り、「成程仰しやればそんなもの。併し一旦浮世を捨て、御出家なされた御主人、何程におつしやるとも、よもや還俗はなされまいが、又殿樣にも無分別、是程綺麗な美しい、旨い盛りの御臺樣を捨置き、坊主になるとはどうした御思案、第一強い不心中。此間から道中で、つく〳〵

と存ずるに、ほんに私らがお前の様な女房を持つたなら、戴いて居る合點、何と談合なされぬか」と、云ひしなづつと立寄つて、後より抱きしめ、「何と〳〵」と頬摺を、髻でするこそうたてけれ。御臺は呆れて詞無く、振放し飛びのきて、「コリヤ女之助、其方は氣はし違ふたか、餘りで物が云はれぬ。石童丸も聞いて居るぞよ。國元を出づる時、監物太郎が念に念、誓を立てし守宮の血、臂にまで塗つたぢやないか。まだ廿日にもなるならず、夫程の大事を忘れ、人で無しめ畜生め」と、やり込め給へば思案して、コリヤ色とりでは行くまいと、きつさう變へてけら〳〵笑ひ、「いかにも國を出る時は、さう思うて出たれども、一月足らず夜も晝も、テモ好い器量、又あるまいと、見る度に思の種、勝りこそすれ忘られず。も云ほか〳〵と、こらへ〳〵ていひ出す今夜、命懸で惚れた戀、厭とあればお二人を、手に懸けて拙者も自害、ヲットとあらば何時までも、こつてりのちん〳〵。サア手短にお返事」と、指添を抜放し、大悪無道に一心が、据り切つたる眼付、天魔の魅入と知られたり。石童丸は稚氣に、何の頑是もなみだ聲、「死ないで叶はぬ事ならば、父樣に廻り逢ひ、其後死なう夫までは、母樣もお詫言。女之助も堪忍しや」と、あどなき詫も武士氣質。御臺は泣くにも泣かれぬ時宜、燃立つ胸を押ししづめ、「命に懸けて自を、夫程思ふが誠なら、兎も角もなるべきが、せめて殿樣に廻り逢ふまで、了簡して待つ

てたも」と、のたまへば、「ならぬ〳〵。是まで欺すが皆其手、そんな甘ちや〳〵には陥らぬ我等。ハテ厭なれば、息子殿から殺してのける。子が可愛くば合點して、夜の更けぬ内ほめいてしまを」「イヤ夫でも」「夫でもとは厭な氣か」「サア〳〵〳〵」と座敷の内を、彼方此方とつけ廻せば、御臺は足の踏みどもなく、若君をかき抱き、「コレ麁相しやんな、アヽ危い〳〵」と、慄ひ〳〵奥の間へ、引外して逃入り給ふを、「どうでも遁さじ、返事は」と、續いて一間に駈入りしが、ごんと一聲釣鐘の、音凄じく鳴響き、驚かされて見し夢は、跡無く覺めて　三重旅　姿、慈尊院の縁ばなに、主従三人笠傾け、前後も知らず臥し給ふ。猶も續いて寺々の、鐘鳴る音に女之助、むつくと起きて月影に、四邊を見廻し、「此處はどこぢや慈尊院、扨は今のは夢であつたか。ハツア難有や嬉しや〳〵、ほんに夢ぢや、忝し」と、天を拜し地を拜し、悦び傍に座を占めて、「エエ我ながら情なき根性かな。明暮御臺を見るたびに、さりとは惜しいお姿、お主ならずは詢きおとし、我妻にせんものと、思ひそむるは日に幾度、我身で我身に異見を加へ、勿體ない恐ろしいと、又思ひかへて心を改め、忠義を盡すと思へども、生れ付いての色好み、淫犯の病を顯し、夢の内とはいひながら、主君に對して不義を云ひかけ、剩へ討ち奉らんとしたりしは、よつく武運に盡きたか」と、暫し涙に暮れけるが、飛退さつて頭を下げ、「御臺樣若君樣、夢の間の

不義不屆、眞平御免下され」と、恐入つての三拜九拜。親子の人は正體なく、寐入りし額に汗たら〳〵、魘はれ給ふに走寄り、「申し〳〵」と搖り起せば、二人ながら起上り、顏を眺めて、「ヤア其方はまだ寐ずか」と、齒の根も合はず面色變り、若君を押圍ひ、立退き給へば南無三寶、夢とは云へど通ぜしよと、胸に磐石押しこむ如く、せつなき心を押鎭め、「お疲も出でしにや、魘はれ給ふに驚きて目を覺し候」と、云ひくろめても氣は濟まず、案じ煩ひ居る處へ、群り來たる人音に、何事やらんと女之助、立上つて眼を配り、「たとへ道行く旅人たりとも、見咎められてはお爲惡しよ。御兩所は笠深々、田舍道者の臥したる體、拙者も暫し隱れん」と、兎角しつらひ片蔭へ、忍びて樣子を窺ひ居る。程無く來る大勢は、かぶろの宿の百姓ども、中にも庄屋が智慧有り顏、「コレ皆の衆、此所の殿樣、大內之助義弘樣がノヨ、遙々の海山を越え直に登つて、繪圖をみんなに一枚づつ渡してノヨ、此繪圖に合うた者を、縛つて來いとのいひつけでござるよ。三十許りな好い女性とノヨ、十許りな美しいちつぺいとノヨ、又三十餘りな色どり男と、どうやら人の女房を、息子共に盜んでかけおちなどと見えるぞや。どうでも難かしい尋者、見付けたら金になりますらよ。共吟味に精出さしやれ。誰が縛つても庄屋だけ、褒美は俺と半分分けノヨ。斷つて置いたぞ」と、云ふを聞きかねしやばり出る、所でちつと理窟者、男を磨

く玉屋の與次、朱鞘の大だら落し差、立ちはだかつて、「コレ爰な庄屋殿、抜作でも身内が慾ちやの。近年は代官に好い人がわせた故、所も騒がず物静で好かつたに、何やら又いひ出して、代官所へ呼付け廻り、ちつと許りの褒美であろが、澤山さうに三人まで、縛つて來いとは旨い殿様。欺されておぬく殿が、縛つたら褒美を取る、ハヽヽヽ、何處へ褒美。わごりよの様な旨い和郎に、縛られる人間があるものかいの。役に立たぬ口叩かずと、サア早く去にませう」と、先に立つを、「コリヤ待て玉屋。われが今の言分を、此智慧者が勘辨するに、褒美が少けりや、見付けても取逃す思案ぢやな。さつきのいひつけをどう聞いたぞ、庇ひ立は成らぬぞよ。お尋者を助けたら、助けた者の首ころりノヨ。是も斷つて置いたぞよ。サア〳〵いづれも去にがけに、慈尊院の境内を、探していのぢやあるまいか。若しもかどんで居よつたらノヨ、餘程な拾物」と、大勢引連れうそ〳〵と、二人の寐姿見付け出し、「コリヤ〳〵爰に何やら居るぞ。縛れ縛れ」と立懸るを、女之助飛んで出で、「何奴なれば旅人を脅かす、近寄つたら撫斬」と、きつぱ廻せど事ともせず、「爰に居る大金を、攫んで去ぬる」と取巻くを、「ヤ汝等は人賣か盜賊か、目に物見せん」と刀の電光、無二無三に切懸くれば、風に蜘蛛の子散らすが如く、逃散りながら口々に、「ヤイ〳〵玉屋、算用の合うた三人、見ぬ顔して助けるか」と、庄屋の一言聞捨て難

く、抜合せて支へたり。「扨はおのは盗賊の張本か、一人も餘さじ」と、女之助は根限り、火水になつて切結ぶ。死物狂ひにさしもの大勢、與次は元より構はぬ氣の、人が逃ぐれば共に逃げて跡なくなりにけり。長追せば悪しかりなんと、刀を納めて二人を呼出し、「かく行先を盗賊に圍まれては叶ひ難し。此間に御供して、何處へなりとも立忍び、夜明けてお山へ登らん」と、いさめ申せば尤と、御臺若君甲斐〳〵しく、帶引きしめて草鞋の紐、結ぶ間遅しと三人は、跡をも見ずして三重雲隱れ、星の逢ふ夜と結合ふ、かぶろの宿の玉屋の與次、内には水が月影の、させども宿へ歸らぬは、心もとなの日暮過、妻のお埒は埒明の、夜なべを捨てて圍爐裏焚く、自由自在なわが世帶、鏘子に沸るひと煎じ、女夫の中のこつちりの、出花も妹脊の端が香かや。娘かどたは門の戸を、閉すと居眠る宵惑ひ、「コリヤそこなお船頭、モウ船を漕出すか、ほんにやれ〳〵嗜めよ。つれあひ與次殿は、終にお代官の顔も見ぬ人、それに今日呼びに來て今に戻られず、おれよりマア其方が案じる筈。なぜといや、アノ與次殿とはなさぬ親子、今にでも戻られ、眠たさうな顔見せて、心の義理が立つものか、寐所でもして置け」と、呵るも親身聞くもおろ〳〵、「母樣こらへて下さんせ、昨夜の大師講の持越で、とろ〳〵が來ました。デエ寢所をして置こ」と、小廻りすれば、「ヲ、それ〳〵、もう初夜過、追付けであらう。寢間掃い

て寢所しや、枕はおれが直すぞ」と、「二つ竝びや」を云ひかねて、娘賴まぬ心意氣、いらぬ遠慮と見えにける。此家を力に女之助、御臺若君うしろに圍ひ、息をはかりに駈來り、門の戸忙しく打敲く。お埒は驚き駈出でしが、待てよ、夫の足音ならずと、「何者なれば夜に入つて、けたゝましや」と咎むれば、「いや苦しからず。我々は旅の者、足弱二人召し連れ、盜賊に出逢ひ、やう〳〵切抜け、是まで參りしなり。三人の命助けると思し召し、御隱まひ下されなば、世に有難く候はん」と、餘儀なく云ふにいやとも云はれず、「主の夫は留守なれども、さほどの難儀見捨てるもお笑止、暫し此方へ御入れ」と、門の戸明くれば三人とも、「命の御恩」と追從し、内へ通れば女房が、心を付けて表を締め、「イザ先あれへ」と圍爐裏の影、互に見合す顏と顏、「ヤお前は、繁氏卿の御臺所、牧の御方樣ではないか」「さういふ其方はお埒ぢやないか」「なに以前の女房か」と、女之助も恠りの、「ても」と「さても」が一時に、手を打ち俱に呆れしが、「さるにても此お姿、何故是まで遙々と、お越ありや」と尋ねれば、御臺は涙を浮めながら、「つれあひ繁氏卿御遁世遊ばし、國は大內に惱され、命危く逃げのび、我夫高野にましますと、人の噂を力にて、此處まで來りし」と、語り給へば俱に目をすり、「いかい御苦勞遊ばすの。若君樣の御成人、何か思へば一昔、變る浮世の有樣」と、憂きを涙に語り合ふ。女之助あたりを見、

「其方と離別せし折柄、かどたといひし水兒を添へしが、見事育て上げたるか、無事で居るか」と尋の詞、齒に衣被せず、「コレいはれぬ昔をお尋ね、誤り無き身に暇の狀、是非なく故郷へ歸り、年寄つた母樣乳呑子を抱へ、どうして暮す當も無く、途方に暮れし折から、此家の主も以前は武士、尾羽打ちからした互の落目、倶過にするならば、母樣ぐるめ養うてやろとあり、二度の夫と思へども、親の爲子の爲に、此家へ嫁つた其年に、母樣も見送り、娘も成人したけれど、何の此方に逢はさうぞ、いひ出しても下さるな」と、けんと云はれて女之助、むつとはすれど宿を借る、無心に詞も無かりける。若君は大人しく、「只何事も堪忍し、今夜は爰に泊めてたも」と、涙含んだる御仰、「こは勿體なきお詞、見苦しけれど一間もあり、いざあれへ往てお休み」と、申上ぐれば御臺所、「主が戻り給ふなら、好きに頼む」と打悄れ、石童君の御手を執り、しをしを立つて入り給ふ。女之助は著きほ無く、倶に奥へと立上るを、お埒はやがて押留め、「御兩所はお主筋、好んでもお宿を申す、其元には宿叶はず、何處へなりと　お越しあれ」と、さし留められて重る強腹、「ヤ無禮過ぎた女め。御大切なる二方を預け、某何處へ行くべきぞ。お主ばかりの好みを思ひ、夫の好みは思はぬか」と、嵩にかゝれば、「サア其好みぢやに依つて猶ならぬ』『ソリヤなぜに』『さればいの、今自には玉屋の與次とて夫あり、其留守の間へ以前のつ

れあひ、泊めてくれとあつた故、泊めましたとはどの口で、どう云はれうぞ無遠慮人。まだ其元は昔の道樂なほらぬの。お二方は此お埒が、命に懸けて預つた、氣遣ひせずと宿無くば、軒の下へも一宿あれ。あたじだらくな」と引立てて、有無を云はせず門の戸を、明けて表へ突出し、理窟で締める鍵は、押すに押されぬ心の錠、稚なじみの合鍵も、工合ちがうて海老の腰、屈めながらに軒の下、暫しと宿るばかりなり。程なく歸る玉屋與次、道のどまぐれ夜を更し、闇を照する禿頭、門の柱でこつょりと、あいたしこょぢやと打叩く。お埒は待ちかね走寄り、明けるや否や、「テモけうとい、今まで何處に何して」と、お定りなる悋氣口、「措け〳〵、今夜はお上の御用筋、夜が更けてもけんぺい、しやつともいふな」と圍爐裏の火を、さし燻べるうち表より、女之助が聲として、「一旦の理に逼り、軒に一宿致せども、寒風烈しく身も冷渡る。御亭主も御歸りと見受けたり、一夜の宿」と乞ひにける。與次は聞耳、「ありや何ぢや、何云ふのぢや」「イヤあれは最前旅人が盜賊に出逢ひ、難儀に及ぶとありし故、引くに引かれず、足弱二人は泊めたれども、お前が留守ゐる男御は遠慮して、外に寐さして置きました」と、語れば、「ハアテそれは大事ない事。これ旅の人、外に寐てなら寒からう、此方這入られい。圍爐裏にあたつて寐られい」と、だうらく詞も情はうれしく、門の戸明けて小腰を屈め、「御免なれ。とてもの事、少し焚火の御

報謝」と、何心なく圍爐裏の端、燃える明りで顔見合せ、「ヤア、わりや最前の侍か」と、俄に變る與次がきつさう。女之助も拔放し、「さういふ汝は件の盜賊、出合た所か百年め」と切かゝればぬき合せ、爰を最後と切合ふ有樣、お埒は夢か幻にも、樣子は知らず、「ヤレ待つて、暫し」といへど聞入れず、詮方盡きて茶の水を、引すくうて燃える火に、ざんぶと懸くればぱつたりと、消えて闇の夜二人はハツと、猶豫しながら聲懸けあひ、「汝盜賊そこ引くな」『侍逃げな』と鵜の目鷹の目、止めるお埒も暗がりで、すべき樣なき折柄に、又も圍爐裏がくわつと燃え、「其處に居るか」と互の切先、南無三寶と杓の水、ばつと懸くればふつと消え、目先手先も知ればこそ。「盜賊め」「侍め」と、聲を力に滅多討、燃えると切合ひ消えると探り、千變萬化の戰に、暫し時をぞ　三重移しける。隙取る內に圍爐裏の明り、七轉八倒お埒は慌て、一間の障子引外し、切合ふ中へ打ちかぶせ、身を捨ておもりと乘懸れば、互の太刀先押へられ、思はずどつかと居すわつて、ほつと息つくばかりなり。音に驚き御臺石童、手燭携へ駈出で給へば、お埒はせきあげ、「これ待つてたべお二人、別けて我夫與次殿、此方の事は所でも、人も恐るゝ男一匹、盜賊よ追剝よと、名を立てられて切先勝負、若しもの事があつた時、妻子までの面汚し、何故さもしい名は取り給ふ。樣子を聞かねば爰放さぬ、サア仔細は」とせく詞を、「尤ぢや女ども、全く某盜みはせず、其侍が同道の、足弱

二人はお尋者。則ち此國の領主、筑紫より大内義弘到著あつて、此繪圖に合ひし者當國へ來りし由、搦取つて渡せとの仰、證據は爰に」と懐より、出して見せたは紛も無き、御臺所と若君の、お姿書きし寫繪に、人々ハット胸痞へ、膽を冷すばかりなり。お埒は常から頼もしき、夫の心を能く見抜き、「コレ其繪のお二人、何國如何なる御方と、知つて此方は捕へるのか」「イヤそりや知らぬ。人違ひでも大事なし、捕へて來いとの仰、身にかゝらねば念押して、問ふ間もなく歸りがけ、慈尊院で出くはし、見遁しならぬ庄屋の一言、其意地持つて此場の出逢、構ふな、退け〳〵、そこ放せ」と刎退けるを、「イヽヤ放さぬ。かうなるからは何を隠さう、是なるお侍は自が前の夫桑原女之助、お供しられた二方は、其繪に違はず筑紫大名、加藤左衛門繁氏様の御臺若君、私が以前のお主ぢや」と、聞くより與次はハット飛退き、「左樣と存ぜず無禮の段、眞平御免」ときをりの平伏、心ゆるさぬ女之助反うちかけ、「ヤア俄の三拜食はぬ〳〵。我等も昔は家來筋などと、古手を以て油斷させ、大内が方へ注進する下心か卑怯者、立上つて勝負せよ」と、勢ひかゝれば、「ヤレはやまり給ふな、其言譯見する物あり、暫らく」と押宥め、簞笥より刀一腰取出し、目通りに据ゑ、「孰もお見知りある刀、立寄つて見給へ」と、云ふに人々氣を付けて、見れば目貫は菊流し。牡丹に獅子の國鍔は、擬ひもなき夫の差替。「實に〳〵繁氏卿

のお刀、コリヤどうして其方が、所持したる仔細は」と、不思議立つれば、「ヲヽ、御不審は尤、もと某は播州の浪人、尾羽打枯し都方へ、奉公かせぎに登る折柄、八幡山崎の間、狐川の渡しにて、さる浪人と口論仕出し、刺違へんと致せし處、其場へ繁氏卿通り合はされ、雙方一分立てよと、御差替一腰づつ下し置かれ、命助るのみか、外聞の腰を塞ぎ、夫より武士奉公の有付無く、此國の土民となつては候へども、御恩は忘れぬ昔形氣、命の親の繁氏卿、其御臺若君と聞き、何と手向ひ申すべき。お疑を晴され、御譜代同然に思し召し下されよ」と、餘儀なくいふに御臺は嬉しく、「實に其事はお物語ありし事。扨は其時お刀を貰うたは其方よの。遣つたる人は御遁世、御跡慕ふ我々が、力となつて今一度、繁氏樣に逢はせてたも。賴少き世の中や」と、卿ち給へば、「御氣遣ひ遊ばすな、天地の間に御座あるなら、尋ね逢はせ參らせん」と、奥底も無き心底を、見込んで猶も女之助、「ホヽヽお賴もしき御一言、迚もの事に御誓言で承りたし、其上賴む事あり」と、云ふに居直り金打し、「諸天善神はおろか、佛意を懸け二言無し」と、聞いて安堵の胸を据ゑ、何思ひけんどつかと坐し、指添抜いて我とわが、腹にぐつと突立てる。人人是は狂氣かと、驚き騒げば、「ア、騒ぎ給ふな方々。思ひ懸なき最期故、御驚きは御尤。何を隱さう某は、生れ付いて好色深く、兒監物太郎が疑を晴さん爲、守宮の血を腕に塗り、誓を立

てて國を出で、心を心で嗜めども、情なや宵の夢、わりなくも御臺へ戀慕、聞入れ無きを手に懸けて、殺さうとまでしたりしが、慈尊院の時知らす、鐘の響に夢覺めて、いつにない御臺には、我姿を見て御恐れ。南無三寶、夢とはいへど通ぜしか、はや切腹とは思へども、我亡くなりては御兩所を、守奉る人無きと、さあらぬ體にて是まで來り、今與次殿の心底見込み、賴み置いて相果てる。申し若君樣、是なる與次殿を力となされ、父樣のお行方尋ね、目出たう御對面遊ばせや。何の因果で此樣に、不所存には生れしぞ」と、我と我身の悔泣、見る目もともに哀れなり。與次は故と涙を隱し、「夢は五臟の煩ひ、何故本心を改め御先途を見屆けぬ。切腹とは腑甲斐なし」と、恥ぢしむれば、「イヤナウ、本心を改めても、夢となぐるになぐられぬ、仔細は腕に塗つたしるし、心の迷で守宮の血が、これ此如く消えたるは、罰か報か天命か。兄監物へ云譯の、種を失ひ是非なくも、かくは計ひ申せしぞや。よししるしが落ちぬとて、最早御臺は虎の子を、供に伴るょと思し召し、片時も心安かるまじ。せめての冥加に御主人の、お心安めにする切腹、是まで盡せし忠節を、無にして死ぬる跡の儀を、賴む〳〵」と云ふ聲も、弱り果てたる息づかひ、與次は哀れの袂を絞り、「せめて最期の思ひ出に、娘かとたに逢はさん」と、呼びに立つを女房が、涙ながらに引留め、「定めて樣子を聞いても居ませう、駈出る筈が駈出ぬ

は、前の親を慕ふかと、思はれまいと思ふから、其氣な娘を呼出して、泣くも泣かれぬ苦をさそより、矢張小蔭で存分に、泣かしてやつて下され」と、子に擬へたる我涙、保ちかねて思はずも、わつとばかりに泣叫ぶ。御臺も倶に御涙、「惚れる身よりも惚れられる、此身の辛さ悲しさを、推量しや」としやくり上げ、歎かせ給ふ御聲が、冥途の形見、南無阿彌陀、「南無阿彌陀佛」と指添を、抜くが此世の暇乞、消えて果敢なくなりにける。ハットばかりに人々の、縋り泣入る折こそあれ、遙に聞ゆる人馬の聲。すは事こそと與次は突立ち、「コリヤ〳〵女房、泣いて居る處で無し。察する所討手の輩と覺えたり。思ふ存分働いて、透間を見てお供せん。まづ夫までは一間へ入れ、聲すな音すな油斷すな。往け〳〵急け」と追ひやり〳〵、七の圖まで尻引からげ、好む所のだんびらを、抜翳して待つ處へ、馬上に跨る大内義弘、松明提燈星の如く、手の者引具しどつと馳寄せ、「ヤア〳〵此家に繁氏が御臺悴石童、隱まひ置いたる條遠見の注進、急いで繩懸け渡せばよし、違議に及ぶとあばら屋を、乘潰してくれんず」と、くわつと睨めたる兩眼は、海に入日の射す如く、あたり眩く見えにけり。内には故と音もせず。「すは風くらつて逃げたるか、踏込めやつ」と呼はる聲、「捕つた〳〵」と捕手の役人、我劣らじと込み入るを、得たりと與次は眞向梨割車斬、さしもの大勢堪り得ず、一引さつと引いたりける。大内は

馬上に歯がみをなし、「所の代官駒形一學、あれ蹴散らせ」と下知すれば、「承る」と駈來る侍、早繩手繰つて大聲上げ、「ヤア〳〵與次、いか程に働くとも、かく十重廿重に取巻いては叶はぬ叶はぬ。違議に及ぶと飛道具、如何に〳〵」と罵つたり。流石の與次も飛道具に、心置かれし折からに、一間の内より、「コレナウ御亭主、迚も遁れぬ我々、急ぎ繩懸け身の難儀、遁れてたも」と障子を明け、出づるを見れば妻のお埒、娘かどたを石童に、仕立てて出づる主思ひ。夫と覺れど恩愛に、心おくれて手をつかへ、「ホヲ、其御覺悟はさる事なれども、一旦隱まひし甚が、むざ〳〵渡す無念さを、御推量下されよ」と、夫婦別れの涙をば、目に浮ぶればお埒も忸れ、「自は覺悟の前、只いとほしきは此石童、あらぬ形の男髪、不便にござる」と共泣に、泣きしをれしが、與次は突立ち、「これ〳〵役人、御辱の兩人、繩懸けてお渡し申す、受取られよ」と云ふ聲に、駒形一學内に入り、透間あらせぬ氣配り目配り、是非なく繩を懸ける内、御臺は駈出で「ナウ悲しや、妾こそ」と、云ふ口押へて立身で隱し、親子を引立て引渡す。表に控へし大内は大聲、「コリヤ〳〵一學、渡し置いたる繪圖あるべし、引合せて受取れ」と、遁れがたなき鶴の一聲、鷲を烏と爭うても、爭ひにくき姿繪を、明りへ出して引擴げ、見るも一生懸命、遁れぬ處と與次は身がまへ。つく〴〵眺めて駒形一學、「繁氏が御臺悴、繪圖の通りに違ひ無し」

と、表へ答へる慥の訴へ。與次は夢かと念に念、「其詞に相違無いか、跡で違變めされな」と、打つたる釘の詞を返し、「ヤアいらざる馬鹿念、駒形一學春秀が受取つたに相違無い。よく繩懸けて渡したよ、當座の褒美に一腰くれる」と、指添抜いて提燈の、明りへ出したは繁氏の、狐川にて情の一腰、「ヤこりや我夫のお差替」「扨は拙者と一時に、御恩を受けた侍か」と、云ふ聲高いを「シィしつ」と、押へて消して引立てる、昔忘れぬ武夫や、見送る夫も妻子をば、恩に替へたる涙の雫、身にふりかゝる御臺の歎き、餘處に見捨てるお埒は忠義、かどたは實の父にまで、後れの髪の男髷、今日は石童明日よりは、賽の川原の石の塔、十づつ十は百歳と、祝ひ飾りし命をば、捨てに行く身を捨てに遣る、思ひは同じ思ひぞと、泣いては送り送られて、屠所の歩と歩みかね、行きては戻り戻りては、泣く音もつらき明烏、かはい〳〵の聲名殘、引かれてこそは別れ行く。

第五

陰德あれば陽報あり、賢き教まのあたり。御臺所石童丸、玉屋の與次が介抱にて、繁氏卿の御在所、尋求める高野山、小石交りの細道を、爪先上りたど〳〵と、辿り給ふぞ切なけれ。御痛

はしや母君は、ならはぬ旅の疲にて、御心地例ならず、歩み難みて休らひ給ひ、「ナウ與次殿、誠や人のならひにて、榮え衰へ浮き沈み、ありとは豫て知りながら、餘所の事よと思ひしに、今身の上に思ひ知る。是につけてもいとほしきは、内寶お琦と娘のかどた、我々が身に代り、敵の中に憂き苦勞、定めて憂目に逢ふやらんと、案じ過しの御涙、倶に悄るょ詞を嗜み、「ハア、譯もなき御歎き、彼等が御身に代りしは、お主大事と一圖の忠義。さはいへ駒形一學は、情を知つたる侍、命には氣遣ひ無し。かやうな小事に御心を、痛め給ふが御病氣の障り、必ずお案じなさるょな」と、口にはいへど心には、胸まで上す涙を押へ、「申し若君樣、親子御一緒にお供して尋廻り、殿樣に逢はせませんと存ぜしに、此御病氣では道捗も參らず、殊に女人禁制の御山、寺中へは行かれぬ御身、お前ばかり先へ駈抜け、繁氏卿を尋ね給へ。私はそろ〳〵と、御臺樣の御供し、女人堂にて待ち申さん。はや疾く〳〵」と勸むれば、今日ぞ戀しき父上に、尋逢ふよと嬉しくて、御心は急かるれど、「やう〳〵二歳の時別れ、夫から逢ひ見ぬ父樣なれば、お顔さへ知らぬもの、何を便りに尋ね逢はん。殊には母樣の御病氣、見捨てて一人私はいや、三人ながら一緒に」と、離れがたなき御風情。御臺所は目を開き、「チ、道理〳〵、さりながら、其方が傍を離れぬとて、此病がなほるにあらず、片時も早く父御を尋ね、女人堂まで

お供しや。殿様の顔見るならば、耆婆扁鵲が薬にも、百倍増したる薬となり、本復するに疑無し。お顔は知らずとお名を名乗り、加藤左衛門繁氏の、今道心は何所にと、出家に逢はど尋ねよや。湯水を取つての介抱より、是に勝したる孝行無し」と、息もたよわき御仰、稚心に聞分けて、「父様のお顔を見て、御本復さへある事なら、成程私が先へ参り、お在所を尋ねましよ。後からそろ〳〵與次を伴ひ、女人堂までお出であれ」と、しを〳〵濡るゝ笠と杖、取上げて立給ふを、顔つくぐ〳〵と打まもり、「そんなら其方はもう行きやるか。西も東も知らぬ身を、手放して遣る氣遣ひさ、跡で案じは如何ならん。父御に廻り逢うたなら、随分早う便りをしや。暫しの別れと云ひながら、人の命は電光石火、打つ石の火より果敢なき喩。母が顔もよう見て置きや、其方の顔も眺めん」と、物が知らせし暇乞。傍で聞く身の胸苦しく、與次は詞もなく涙、目をしばたゝき彼方向く。若君何の頑是も無く、「然らば母様後程」と、立出給ふ。「コレ山道を外見して躓くな、怪我ばしすな」と氣を付けて、見交し〳〵別れたる、是が此世の名残とは、後にぞ思ひ知られたり。與次は御跡見送りて、涙を拭ひ、「サア是から御臺様、坂の間を負ひ参らせん。いざさせ給へ」といふ所へ、女房お埒娘のかどた、息をはかりに駈來るを、見るより恠り、「ヤア女房か。ナウ娘のかどたか」と、御臺も倶に御驚き、浮木の龜の對面と、悦

び給へば溜息つき、「不思議に命助かりしが御運の末、折角親子が心を碎きし、お身代りも贋者と、新洞左衞門にいひさがされ、いとほしや駒形一學殿、直に其場で御切腹。我々も危き所を、やう〳〵切抜け逃げたれども、追手の來るは知れた事、早う立退く御思案」と、いふに驚く與次が面色、「出來した〳〵。併し此の如く御大病、たやすく遁れ逃げ難し。若君ははや御山へ。我も娘を引連れて、御臺樣を肩に懸け、女人堂に預け置き、立歸つて防ぐべし。其間を汝踏止り、暫く追手を支へよ」と、さしたる一腰投出せば、「ヲヽそれ〳〵好い合點、爰は妾に御任せ。此所より一寸も、追來る敵を山へは登さぬ。氣遣ひあるな」と男勝り、脇差取つてわき挾めば、「よくせよ、ぬかるな女房」と、御臺所を負ひ參らせ、娘が手を引きいつさんに、山深くこそ急ぎける。「サア彼方がたさへ落したら、心に懸る事無し」と、獨言する折こそあれ、籠より來る大勢は、大內之助が雜人ばら、おつ取卷いて聲々に、「ヤア贋御臺の喰はせ者、逃ぐるとて逃がさうか。誠の御臺石童は何所へ落した、有樣にほざき出せ。僞ると肝先へ、太刀魚がお見舞」と、犇き騷けどちつとも臆せず、「ム、親子御の行方が聞きたいか。夫は天竺の四日市、太儀ながら上つてござれ」「テモ咽のえらい女め。叩き殺せ」と拔連れ〳〵、切つて蒐ればまつかせと、同じく此方も拔放し、「どれ御自慢の太刀魚を、箔摺剣す繩だら料理、切味を賞翫」と、多勢を相

手に縦横微塵、火花を散して、三重戦ひけり。女なれども忠義の一念、飛鳥の如く駈廻り、なぐり立たる太刀先に、「コハ叶はじ」と雑人ども、はふ〳〵逃げて失せにけり。「ヤレ此隙が好い引時、長居は恐れ」と逃ぐるも追はず、御臺所と夫の跡、慕ひてこそは、三重行く空の、雲間に近き八葉の、峯に紫雲のたなびきし、高野山と聞えしは、三面に山連り、源一水にして萬水東に流れ、大師二犬に道を習ひ、開き始めし靈地とかや。いたはしや石童丸、斯る難所をたど〳〵と、心も空に浮草の、根ざしの父は顔知らず、名のみ知るべに尋行く、袖の涙ぞ哀なる。思ひ高野の谷川や、左手は岩間、右手はあまのの山風、峯に煙の一結び、見上げて通る不動坂、踏みも及ばぬ丸木橋、名残なさけも横吹の、嵐に木の葉散りはてて、心細道つく杖は、おりつ上りつ行く先を、問へどいはねの松蔭に、暫し休らひ給ひける。百年の榮燿は風の前の燈火、悟れば吾も佛なり。煩惱菩提と諦めて、加藤左衞門の尉繁氏入道、苅萱道心と名を改め、佛法修行の山坂を、辿るも後世の便りかや。石童親子の機縁にや、思はず傍に走寄り、「申し御出家樣、此御山に今道心のましまさば、教へてたべ」とありければ、「コハ興がる少人かな。九百九十の寺々、毎日入り來る初發心、昨日剃つたも今道心、一昨日剃つたも今道心。左樣に尋ね給ひては知れ難し、俗の時の名をいうて尋ねられよ」と身の上の、事とも知らず仰ある。「さればとよ、

尋ぬるは自が父上、二つの年別れし故、お顔も見知らず。元は筑紫松浦黨、加藤左衞門繁氏樣」と、いふより扨は我子かと、取縋らんとしたりしが、待て暫し、佛前にて誓を立たる恩愛妹脊、爰ぞと思ひ餘所〳〵しく、「ムウ年も行かぬに遙々と、慕ひ來る志、誠の父が聞かれなば、嘸嬉しくも懐しく、飛びつく程に覺されんさりながら、此山の掟にて、たとへ廻り逢うたりとて、名のり合ふ事かつふつ叶はず。早々國へ歸り、母御を大事にかしづくが、又一つの孝行」と、いひ教ふれば、「イヤナウ我國は、大内といふ者攻惱し、母樣諸共此山の麓まで參りしが、悲しき事は母樣が、道の疲に煩うて、命の内に只一目、父に逢せてくれよとのお歎き。情と思うて御在所、御存じならば教へて」と、目に持つ涙はら〳〵と、押へかねたる有樣に、我こそと名乘つて聞かそか、いや勿體ない師の御坊の戒め。と云うて遙々來たものを、知らず顔見ぬ顔が、どうなるものぞ不便やと、胸に堰きくる血の涙、こたへかねて思はずも、わつとばかりに泣給ふ。石童丸は目賢く、「左程に歎き給ふのは、若し父上ではあらざるや、早く名乘つて給はれ」と、縋り歎かせ給ふにぞ、「亂れ心の折節に、後の方の岩蔭より、師の阿闍梨の聲として、「ヤア〳〵苅萱、妻子入無爲〳〵の誓を忘れ給ふな」と、制せられて苅萱は、起上つて振返り、「ハア、さうぢや、迷ふたり誤つたり。今此三界悉是吾子、孰れを我子と思ふべき。師の手前も面目なし」

と、衣の袖を打拂ひ〳〵、「ハレ小ざかしき少人かな。哀を共に見捨てねば、我を父よと縋る事、穢らはしや忌はしや。おことが尋ぬる繁氏入道、此山におはせしかども、諸國修行に出で給ひ、今は行方も知れざるぞ。急ぎ下山し母親の、病氣の介抱召されよ」と、つれなく云へど何處やらに、殘る詞のいやまさり、「なに父上は行方も知れず、此お山におはせぬとや。ナウ情なや淺ましや。我はともあれ母樣が、焦れ死をなされうかと、夫ばつかりが悲しうて、跡へ戻るも戻られず、似た人にても在るならば、逢はせてたべ」とかきくどく、心ぞ思ひ遣られたり。倶に張裂く思ひをば、押隱して懐より、包みし藥取出し、「コレ、是は師の坊一萬座の護摩を焚き、調合ありし妙藥、母御に用ひ看病あれ。來た道筋は難所にて、草臥足では叶ふまじ。此方へ行けば花坂とて、平地も同じ事、馬もあり駕籠もあり。いざ〳〵立つて行かれよ」と、心強くも引立てられ、石童丸は泣く〳〵も、藥とあるを力にて、押戴き〳〵、是非もなみだの泣別れ、迷ひ道をばそこゝゝと、教へながらも苅萱は、心もとなさ思はずも、引かるゝ縁の友綱や、見えつ隱れつ三重慕ひ行く。息をはかりに玉屋の與次、御臺所を負ひ奉り、娘を引連れ、女人堂まで來りしが、跡先眺め片蔭におろし參らせ、「お心持は如何ぞ」と、申上ぐれば御臺所、苦き體を押隱し、「自ら事は思はずとも、お垉を救うてたもるのが、我爲の良藥」と、のたまふ詞に跡

先を、思ひ廻して猶豫せしが、「いかさま女の手業に追手を防がせ、見捨てて置くも心もと無し、仰に任せ引返し申すべし。コリャ〳〵かどた、大事の〳〵御臺樣ぢやぞ、お傍を離れず御介抱申せ。お腰でも撫らしてござりませ、つい往て參ろ」と口輕く、飛ぶが如くに引返す。御臺は重る病の床、涙ながらに「ナウかどた、向ふの道より石童が、歸る姿は見えざるか。戀しの我子や、懷しの我夫や」と、彼方を見ては打倒れ、此方を見ては伏轉び、最期も近き御有樣。かどたは悲しく、「コレ御臺樣、父樣や母樣の歸らしやるまで、どうぞまあ、死なずに居て下さりませ」と、あどなき詞かいしよなき、娘の肩に介抱せられ、「自も石童が、便り聞くまで〳〵と、氣の張弓も弦切れて、死ぬる今はになりしぞや。與次夫婦が歸られなば、石童事をくれ〴〵も、賴んで死んだと云うてたべ。せめて最期に夫や子の、顏見る事が叶はずは、聲なと聞いて死にたい」と、御山の方を打眺め、「眺めても口說いても、逢はれぬ事か」としやくり上げ、泣く音もつらや息切の、露の命の果敢なくも、消えて跡無くなり給ふ。かどたは慌て「ナウこれ申し」申しと云へど其かひも、なくも泣かれず立つたり居たり、母樣呼びに走らうか。父樣はなぜ遲いと、坂を駈下り聲を上げ、「父樣なう、母樣なう、御臺樣が死なしやつた。コレなう戻つて下され」と、聲をはかりの叫び泣、ことわりせめて哀なり。頃は臘月雪空に、餌ばみ乏しき山鴉、可愛

可愛を引替へて、死骸にたかれば、なう悲しやと駈けよつて、彼方を追へば此方から、たかりかゝればせん方も、小石を拾ひ打つ礫、そこよこゝよと駈廻り、體も息も絶える程、父を呼び鳥を追ひ、追廻れども小娘の、泣く音もつらき折柄に、石童丸は徒歩跣、かくと見るより走りつき、群る鴉を切拂ひ、あへなき死骸を揺起し、「ナウ情ない母様、かくなり給ふ事ならば、何しにお側を離るべき。父上には得逢はず、お前に別れて私は、何とならうと思し召す。これ結構なお薬を、御出家様に貰ひました。是を上つて健になり、たつた一言石童かと、物いうてたべ起きてたべ」と、薬取出し噛みこなし、かひなき母に吹込んで、「ナウ母様〳〵」と、起し立て抱擁へ、前後不覺に泣き給ふ。斯る哀を遠目から、見るより思はず苅萱道心、走寄りしが是までさへ、立てし誓を今更に、無下にはせじと目を押拭ひ、「コレ〳〵少人、悲しきは理ながら、いたく歎くは佛の迷ひ。いで〳〵廻向し參らせん」と、口に唱名、心には、我を慕うて遙々と、海山越えて來りしに、妻子かとも得いはずに、餘所に扱ふ我心、草葉の陰からさぞ怨まん、赦してくれよ我妻と、念誦に交る胸の中、止めかねさせ給ひけり。然るところへ與次夫婦駈戻り、「ヤア御臺様は御最後か」と、驚き騒げば女房が、苅萱を一目見て、「なうお久しや繁氏様」と、云ふに石童、「何、此お方が父様か。懐しや戀しや」と、縋り給へば衣の袖、打拂ひ〳〵、逃

げんとし給ふ後より、「ヤレ待ち給へ我君」と、聲を懸けて監物太郎、大内之助に大綱懸け、息をはかりに駈來り、「勅命請けて一戰に討勝ち、生捕つて參つたり。如何計らひ申さん」と、云ふより與次が踊出で、何かはなし急いで首を、既にかうよと見えける處へ、「暫し〳〵」と新洞左衞門、飛鳥の如く飛來つて、「謀反人とは云ひながら、未だ旗を揚げたにあらず、一家中の歎きを思召し、一命助け給はれ」と、平伏すれば苅萱道心、「助けるとも殺すとも、私には計らひ難し。都へ行きて奏聞遂げ、命乞して得さすべし。夫を我子石童が、筑紫へ送る轢」と、仰に依つて引立つる、大惡無道の强敵も、我神國の御注連繩、治る御代のためしとて、惡人亡び國安全、民も豐に萬々歳、千代を祝ひし筆の跡、長くも語り傳へたり。

苅萱桑門筑紫轢　終